JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS
JANUARY
2024

1

特集

協力隊の「活動成果」を考える

クロスロード

2024 JAN

Contents

表紙によせて

サンパウロ州のサントス日本人会日本語学校で活動しており、写真は市内のアニメイベントに学校として出展して書道教室を行った時のもの。現地の人々は書道に「かっこいい」イメージがあるようで、大盛況でした。学校の規模拡大のため日本関連イベントへの参加に注力しているので、今後もこうした取り組みを続けていく予定です。中村佑麻さん（日系JV／ブラジル／日本語教育／ 2022年度7次隊・埼玉県出身）

2 子どもたちに伝えたいSDGs ―世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

6 特集 協力隊の「活動成果」を考える

14 派遣国の横顔 セネガル ～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

21 いま、読みたい電子書籍

22 専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

24 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

26 ひきつけるアイデアを共有 みんなの教材づくり＆アクティビティ

28 先輩隊員のシューカツ記

30 派遣から始まる未来 進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 あの日、地球の、あの場所で。

35 隊員めし 任地の食生活に彩りを！

36 公開！ 私の派遣国生活

■国別索引

	掲載ページ
インドネシア	7
エルサルバドル	26
ガーナ	7、23、28
グアテマラ	24
ケニア	4
コスタリカ	7
ザンビア	24、30
シリア	35
ジンバブエ	23
スリランカ	36
セネガル	15、16、17、18、19
ソロモン	2、34
パプアニューギニア	21
ブラジル	1、5
ブータン	35
モルディブ	7

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	4
村落開発普及員	7、30
プログラムオフィサー	23
野菜栽培	15
養殖	16
環境教育	36
陸上競技	7
水泳	7
野球	23
PCインストラクター	28
システムエンジニア	21
音楽	35
日本語教育	1
日本語教師	5
理科教育	2
体育	34
小学校教育	18
家政・生活改善	24
家政	17
手工芸	26
看護師	19

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
岩手県	36
茨城県	7
東京都	4、16、24、35
千葉県	21
埼玉県	1、15
神奈川県	7、19
静岡県	30
岐阜県	5、17、28
滋賀県	24
京都府	2
大阪府	7
兵庫県	23
奈良県	26
広島県	7
福岡県	18
熊本県	34

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。
編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

顕微鏡を使った実験は大人気だった。植物の細胞や口腔内の細胞など身近なものをいろいろと見て楽しむ生徒たち

理科の授業を通じて、自分で考える楽しさを感じたり、話し合いから視野を広げてほしいと枚山さん

子どもたちに伝えたいSDGs 世界の学校

学校は自分と異なる意見や考えに触れる場 実験やグループワークを通じて違いを経験

枚山良子（すぎやまよしこ）さん（ソロモン／理科教育／2018年度1次隊・京都府出身）

ソロモン諸島のマライタ州の州都郊外にある州立アリゲゲオ中高校（※）で、子どもたちに理科を教えながら、同僚の教員にも授業の方法を伝えました。

特に力を入れたのは実験を取り入れた授業の展開方法です。教科書がすべての生徒に行き渡っていないため、授業は教科書の内容を先生が黒板に書き、それを書き写す作業が中心でした。でも、実験には大切な意味があります。それは、答えを聞く前に自分たちで考え、実験をやってみて、なぜそうなるのかを考えることです。また、常識だと思っていたことが実は違うとわかる瞬間も楽しく、貴重な体験だと思います。

実験器具はほとんどなかったのですが、顕微鏡が3台ありました。扱い方を知っている先生がいなかったため使われていなかったのですが、教えたところ、すぐに人気の実験器具になりました。

「顕微鏡で見たいもの、持ってきて」と言った時、一番人気があったのはケジラミでした。血を吸っていれば、それがわかるからです。他のクラスの生徒も、教員たちも見に来て行列になったほどです。

実験では、燃えやすい液体とそうではない液体を確かめることもやりました。「液体を集めてきて」と呼びかけて、現地の酒、ビール、酢、油など、どれが燃えやすいか、紙に浸して火をつけるなどして確かめました。また、たまたまあったベネジクト溶液を使って、唾液の働きを調べる実験も行いました。

実験の前後には、グループで話し合うということも取り入れました。任地の授業では、自分の考えを発表する習慣がなかったからです。話し合いをすると、周りの友達から想像もしていなかった意見が出ます。この体験が大事です。自分の世界が広がる瞬間です。学校とは、さまざまなバックグラウンドをもつ人たちが集まり、共に自分の視野や可能性を広げていく場だと思います。

Text＝三澤一孔　写真提供＝枚山良子さん

※ソロモン諸島中部のマライタ州立の寮制の学校で、日本でいう中学1年から大学1年までの7学年の生徒が在籍している。

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from Kenya

ゼロから始めた稲作が100人近くに普及 任地の環境に適した農業で所得向上を目指す

田中 慧さん（ケニア／コミュニティ開発／2021年度7次隊・東京都出身）

私が活動しているケニア西部のエムハヤは、多くの小規模農家が住む丘陵地帯です。私はエムハヤ・サブカウンティ農業事務所に所属して、農家への支援、特に陸稲（※1）の普及に力を入れています。

私が赴任した2022年3月には、任地で稲作をする農家は皆無でした。ナイロビでの現地語学訓練の先生から「弟のジェームズがエムハヤで農家を営んでいる」と聞き、活動序盤に現地調査で訪ねたところ、現地の主要作物はメイズ（トウモロコシの一種）であるものの、雨期には地面がぬかるむほど湿潤なエムハヤの環境が、乾燥した土地でよく育つメイズの栽培には不向きで、収量が芳しくないという問題を知りました。

そこで私が収入向上策として提案したのが、メイズと同じく主食として需要のある米の栽培です。特に陸稲であれば灌漑設備が必要なく、作業も、肥料をまいて3回の除草をする程度。また、雨期の初めに種をまくと4カ月ほどで収穫でき、雨期が3月と9月ごろの2回来るケニアでは二期作が可能です。「自分たちで育てられるとは思ってもいなかったけれど、教えてくれる人がいるならやりたい」とジェームズも興味を持ってくれました。

農業経験がなかった私ですが、訓練中に読み込んでいたネリカ米（※2）の育て方のテキストを頼りにやってみようと決めて、22年5月にジェームズのほか、過去に稲作研修を受けた経験のある80代男性の2人と共に試験的に種まきを行いました。この時期は雨期の始まりではなかったので収量は多くありませんでしたが、9月には収穫できたため、本格的に続けていくことになりました。

再び始まる雨期に合わせた2回目の種まきでは、参加する農家が5人に増加し、23年3月の3回目からは話を聞いた人が集まって67人に急増。ワークショップを開催して種まきや栽培の方法などを教え、希望者には現地業務費で調達した種もみを1キログラムずつ配布しています。現在進行中の4回目では別の地域からも教えてほしいとの声がかかり、参加者は100人近くにまでなりました。

もちろん、取り組みは試行錯誤の連続です。例えば精米の際、当初は私やジェームズなど3人が代表して全員の収穫米を預かって別の町にある精米機を使わせてもらっていました。ところが、精米するともみ殻やぬかの分だけ量が減るために参加者から不平や不信の声が上がり、その後は、参加する農家から集めたお金で精米機を1週間リースし、エムハヤに持ってきて各自に使ってもらうようにしています。

私の任期も残りわずか。継続性のある取り組みにするため4回目は見守りに徹していて、今や指導的立場となったジェームズには精米機の手配をお願いしたりもしています。農家の中には、収穫した種もみや白米を隣人や地元の店に売って実際に収益を出す人も現れていて、任期中にこうした結果を目にすることができたことを本当に嬉しく思います。

1 収穫期を迎えた畑で農家の人たちと。種を提供した農家には毎週訪問して稲の生育を共に見守り、必要な助言を行っている
2 ワークショップで参加者の前に立って話すジェームズ。田中さんの活動に欠かせないパートナーとなっている

※1 陸稲…「りくとう」や「おかぼ」と呼ばれる、畑で栽培できる稲。水利の良くない環境でも育てられる利点がある。
※2 ネリカ米…New Rice for Africaの略称で、高収量のアジア稲と病気・雑草に強いアフリカ稲を交配させた品種全般を指す。1992年にアフリカ稲センターが初めて開発して以降、水稲60種、陸稲18種が登録されている。

Text＝内井理美　写真提供＝田中 慧さん

from Japan

愛知県知立市で外国にルーツを持つ 児童・生徒への学習支援を続けています

越智さや香（旧姓 今井）さん（日系JV／ブラジル／日本語教師／2005年度0次隊・岐阜県出身）

愛知県知立市は人口の7％超が外国人です。自動車関連の工場が近隣に多いため、全国平均（2％超）を大きく上回る数の外国人が暮らしています。市は知立東小学校内に早期適応教室（※）を設置。市内の小中学校に入る日本語がわからない子どもたちに日本語や日本の学校生活について教えています。私もその指導員の一人です。

外国人が多く住む知立団地に囲まれた同小学校は、児童の半数以上が外国にルーツを持つ子どもです。国語は指導形態別、算数は習熟度別に、グループを分けて授業を行います。全国的にも珍しく素晴らしい取り組みです。一方で、放課後の学習を地域でサポートする必要性も感じてきました。日本語がわからず、日本で教育を受けていない親は、子どもの宿題などを見てあげることができず、困っているからです。子どもは生活言語を比較的早く覚えますが、学習言語の習得には時間がかかります。きめ細かい、長期的な支援が必要です。

そこで2009年1月に始めたのが「学習支援教室みらい（以下、みらい）」です。知立団地内にある市の多文化共生センターを使って、元教員などの有償ボランティアが小学生と中学生の学習をそれぞれサポートしています。教材費として小学生は750円、中学生は1500円。運営費は市の補助金で賄っていますが、お金も人も十分とはとてもいえません。

みらいに通う小学生は22人（23年11月現在、以下同）です。日本語のレベルがそれぞれ違うので、支援員1人につき生徒は多くて2人程度。家庭で保護者が勉強を見てあげるようなアットホームさを心がけています。

中学生には進学に向けた学習支援で、テストの点数が上がりやすい数学と英語に絞って教えています。中学生は14人です。昨年度、嬉しいことに、中学2年生と3年生で編入した生徒が日本の高校に合格しました。そこで今年から、彼らのような高校生の未来を応援するため、日本語能力検定試験対策を行っています。

今年度、みらいに通う児童生徒の出身国はブラジル、ペルー、ミャンマー、スリランカです。年に1回は保護者会を開いて、漢字辞典の引き方や算数の文章題を解くコツ、日本の教育制度、高校進学についての情報などを伝えています。

みらいの取り組みを通して、就学前の段階で、外国人保護者には正しい育児情報を得て、同じ地域で子育てをする仲間づくりをしてほしいと感じるようになりました。そこで13年に活動を始めたのが「多文化子育てサロンみらいJr.」。子育ての悩みを気軽に相談できて交流も楽しめる場所です。保健師などの専門家による正しい育児情報を「やさしい日本語」で提供しつつ、踊りや遊びなどを通じて親子で楽しみながら、参加者同士がつながれる工夫もしています。外国人が集住している地域でも孤立してしまっている親子は少なくないことがわかったからです。参加無料で予約も不要です。国籍関係なく、日本人も参加できます。毎月第4土曜日に開催。多い時は60人近くの親子が参加してくれています。

みらいは、14年にNPO法人化しました。課題は山積しており、日々奮闘しています。私自身、子育て中の家庭との両立は大変で、単発ではなく長期的に活動を続けることの大変さも日々感じています。それでも「みらいがあってよかった」と言ってくれる親子がいることにやりがいを感じ、この活動を続けています。

1 多文化共生センターは団地の商店街の中にある
2 小学校2年生のクラスの様子。子どもの習熟度に合わせて教える

※早期適応教室…日本語教育が必要な児童生徒に対して、小中学校への早期の適応を図るため、約3カ月間、初期の日本語教育や小中学校への適応指導を行う教室。

Text=大宮冬洋　Photo=ホシカワミナコ（本誌）

特集

協力隊の「活動成果」を考える

任期終盤になると特に、
目に見える活動成果を残さねばと焦ることもあるでしょう。
しかし何を持って成果と考えるか、
どの段階で判断するかなどで成果の捉え方も変わってきます。
4人の先輩隊員に活動を振り返っていただき、
成果の捉え方についてアドバイスをもらいました。

Text＝池田純子　Photo＝ホシカワミナコ（本誌　後藤さん、小國さんプロフィール）
写真提供＝ご協力いただいた各位

自分のいた証しを残せたかはその時にはわからない

協力隊の隊員たちが、なぜ成果を出さなければいけないと焦るのか。それは「自分の2年間が無駄でなかったと思いたいとか、自分がここにいたことに意味があったとか、派遣国のために何か残したいといった思いがいつの間にか生まれてしまうからではないか」と話すのは、2008年度のモルディブの陸上競技隊員、現在はJICA青年海外協力隊事務局で働く後藤大祐さん。

しかし自分のいた証しを任地に残せたかどうかは、その時にはわからない。「派遣から30年以上たってわかった」と話すのは1986年度に水泳隊員としてコスタリカに赴任した磯野美子さんだ。

当時のコスタリカからの要請は、シンクロナイズド・スイミングのナショナルチームの選手の育成。20代の磯野さんが任地に赴いて驚いたのは、選手希望の人たちが自分と同世代の20代だったことだ。「シンクロの選手は体力的なこともあって、10代が花なんです。私自身、中学生から始めました。20代では遅すぎる。しかもコスタリカの選手希望の人には泳げない人もいました。選手育成は難しいと感じて、赴任して早い段階で、活動目的を指導者育成に変更しました」。

磯野さんの活動場所は、首都のサンホセとカルタゴの2カ所の学校。

「とにかく生徒たちに見る目を養ってもらいたくて、日本から持参したビデオやテキストをフル活用しました。テキストは生徒と一緒にスペイン語に訳していき、オリジナルのテキストに作り変えました。また水中スピーカーや水着も手作りしました」

磯野さん自身、選手経験はあっても指導者は、ほぼ未経験。試行錯誤しながら同世代の指導者を育て、生徒たちが指導した子どもたちの大会を開催することができたのが帰国直前。帰国後は、見込みのあるカルタゴの生徒一人を日本に招き、1年間のトレーニングを行った。

また、一般社団法人協力隊を育てる会が主催する「視察の旅」のつき添いで現役隊員の親たちを任地に連れていくため、帰国1年後にコスタリカに里帰りしたが、その時の現地の状況は「それなりにやっていたので安心しました」。その後は元の会社に復職、25年間勤めた後、心理学の道へ。そんな磯野さんに、思いがけない人から連絡がきたのは2020年のことだ。

「インドネシアでシンクロを教えていた現役隊員の女性から、私に会いたがっている女性がいると私のSNSに連絡が届いたんです。会いたいと言ってくれていたのは、かつてサンホセでの生徒だったクリスティーナ。彼女は、なんとコスタリカのナショナルチームのコーチになっていたんです」

驚きと共に嬉しさが湧き起こったが、〝クリスティーナ〟という名前を聞いても、すぐには顔を思い出せなかった。それぐらい目立たない生徒だった。しかしクリスティーナとつながったおかげで、磯野さんは23年3月にコスタリカへ30年以上ぶりに里帰りし、クリスティーナをはじめ、当時の生徒たち20人近くと再会した。

「まずクリスティーナが教えていると ころを見学させてもらい、びっくりしました。私は水の中でカウントを取る時に、はしごに金具をカンカン当てていましたが、それと全く同じやり方をしていたのです。その後、開かれた懇親会の席で、かつての生徒一人が持参した箱を、宝箱のように開けてくれたんです。そうすると当時の教則本や新聞が出てきて……、ずっと大切にしまってくれていたことに感激しました」

クリスティーナによると、現在コスタリカのシンクロチームは4チーム。そのアクロバティックな競技レベルは、磯野さんが教えたレベルをはるかに超えていたという。

皆でスペイン語に訳して作り上げた指導書

お話を伺ったのは

小國和子（おぐにかずこ）さん
インドネシア／村落開発普及員／1994年度2次隊、シニア隊員／インドネシア／村落開発普及員／1998年度0次隊・大阪府出身
日本福祉大学国際福祉開発学部・同大学院国際社会開発研究科教授。開発人類学を基に農村開発援助実務、研究に携わる。研究テーマは農村開発・生活改善・フィールドワーク論・文化と開発・月経衛生対処など。

太田美帆（おおたみほ）さん
ガーナ／村落開発普及員／1996年度1次隊・茨城県出身
JICA国際協力専門員（農村開発分野）。玉川大学リベラルアーツ学部教授。2021年度までコミュニティ開発職種の技術顧問。世界各国の農村でお母さんを元気にする生活改善活動に携わる。共著書『世界に広がる農村生活改善』（晃洋書房）。

後藤大祐（ごとうだいすけ）さん
モルディブ／陸上競技／2008年度2次隊・広島県出身
JICA青年海外協力隊事務局 海外業務第二課主事。協力隊から帰国後は、NPO職員としてパレスチナに約1カ月間滞在し、協力隊事業の本質に気づき、駒ヶ根訓練所（訓練スタッフ）やインド（企画調査員［ボランティア事業］）で勤務後、現職。

磯野美子（いそのよしこ）（旧姓 米倉）さん
コスタリカ／水泳／1986年度3次隊・神奈川県出身
心理カウンセラー、心理カウンセラー養成学校運営。NECに勤務しながら協力隊に現職参加。帰国後は、広報部社会貢献推進室に勤務。2010年に退職した後は、心理学の道に進み、現在に至る。

とにかく一生懸命取り組んで悩むことはダメなことではありません

島々を巡回指導した後藤さん

隊員時代の磯野さん（手前）。サンホセの生徒たちと

コーチになったクリスティーナと再会

同年夏、クリスティーナはコスタリカのナショナルチームと共に、世界水泳選手権2023福岡大会に出場するために来日を果たした。

「愛を持って教えてくれた」と言われたけれど……

振り返ってみると、磯野さんが力を入れて教えて日本にまで送り込んだカルタゴの生徒は芽が出ず、思ってもいなかったクリスティーナというサンホセの生徒から芽が出て育った。

「結果的に全く意図していないところで成果が出たわけです。しかも、それがわかったのは30年以上たってから。クリスティーナは『ヨシコは愛を持って育ててくれた』と言ってくれましたが、その時はただ一生懸命やっていただけ。当時は成果といえる有形のものを残すことはできませんでしたが、このように無形のものは残すことができていたんですね。そして、そこで教えていた生徒が、私が教えたレベルをはるかに超えてコーチになったなんて、信じられません」

人を育てるというのは、子育てと同じで、すぐには成果が出ない。だからこそ、現地の人と共に育ち合うほうが楽しいと力を込める。

「私は生徒たちと同世代ということもあって、よく一緒に遊び、よくけんかもしました。互いに育ち合ったという感覚が強いですね。結局、成果を追い求めると、どんどん視野が狭くなっていってしまう。精いっぱいのことをやっていれば、何か残すことができるかもしれないし、やがて思いがけないギフトがもらえるかもしれません」

コーチとしての成果と協力隊員の成果は別もの

「人を育てることは、すぐには成果が出ない」、磯野さんの実感だが、中にはたった2年で成果を出した人もいる。冒頭で登場した後藤さんは、それに当たる。中学校、高校、大学と陸上選手だった後藤さんは、モルディブの陸上競技の普及と強化のためにコーチとして派遣された。

地方巡回が始まり、現地コーチや選手に指導していく中、とある島では指導した生徒たちから大会で記録を出したり、国の記録を塗り替えたりする者が出てきた。

「当時のモルディブの陸上競技のレベルは日本でいう中学生の全国大会出場レベルにあって、それだけ伸びしろがある状態。まして日本のように日常的にトレーニングする習慣がなかったため、当然伸びるわけです。どんどん記録が出るから、あのコーチはすごいなんて評価を頂いていたんです」

わずか2年で、しっかり成果を出して評価を受けた後藤さん。さぞや充実した隊員生活かと思いきや「納得できなくて」と声を落とす。

「陸上競技のコーチとしての成果は出せたけれど、協力隊員としての成果は出せたのかと悩んでしまって。モルディブの人たちの陸上競技の能力を上げたからといって、国の記録を超えたところで、彼らのお金になるわけでもないし、就職できるわけでもない、何になるんだろうって。小学校教育の隊員は子どもの将来の幅を広げるし、野菜栽培の隊員は仕事につなげられるし、周りの隊員たちはすごくモルディブのためになっている気がして、自分の成果はこれでいいのかなと」

教え子が私のレベルをはるかに超えるコーチに

悩んだ後藤さんは、苦しい胸のうちを企画調査員（ボランティア事業）（以下、VC）に打ち明けると一言「友達になれば十分だよ」。

「そう言われて、私はすごく腹が立ったんです。友達をつくるためにわざわざモルディブまで来たのか。そんな私のために税金を使ってもらっているのかと、申し訳なくもなりました。確かに協力隊の目的は、①開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、②異文化社会における相互理解の深化と共生、③ボランティア経験の社会還元、とあります。でも当時の私にとっては①が重要で、②はなぜ重要なのか疑問を持っていたんです。だから協力隊の目的は、私の職種に当てはまらないのではないかと疑問に思っていたのです」

記録という成果を上げ、お礼を言われる一方、後藤さんがやっていた指導法が引き継がれることもなく、何も変わらなかった。協力隊の在り方、案件の意義がわからず、モヤモヤしたまま任期終了。「協力隊が大嫌いになって帰ってきた」そうだ。

パレスチナで男の子に突進されて目が覚める

そんな協力隊事業に不信感を抱いていた後藤さんが、今は協力隊事業に心底ほれ込み、仕事として携わっている。転換点はパレスチナでの出来事だ。

「協力隊から帰国後、広島のNPOに就職し、そこの職員としてパレスチナに一時的に赴任しました。パレスチナに行くと、そこらじゅうに銃を持つイスラエル兵士がいました。ある日、外を歩いていたら小さい子が自転車でこっちに向かってきたんです。アジア圏以外の国では東洋人はよくからかわれますが、ここでもそうかなと思ったら、なんと自転車で直接ぶつかってきたんです。小さな子ですら、よそ者を攻撃してもいいという感覚でいることにショックを受けました」

その時に後藤さんの頭にふと浮かんだのが「友達になれば十分だよ」と、モルディブ時代にVCから言われた言葉だった。

「私の中では怒りにしかならなかったあの言葉が、すっと腹に落ちたんです。なるほど、私はモルディブに陸上競技を教えに行ったわけではない。陸上競技はツールであり、これを通じて、私という日本人とモルディブ人が仲良くなった。それが日本国とモルディブ国の住民レベルの関係につながるんだと。そしてそれに対してお金をつけている日本政府はすごいじゃないかって。百八十度、見方が変わったんです」

その後すぐにNPOを退職し、JICAで働くことを目指して今に至る。隊員としての成果について悩み続けて、ようやく異国の地で自分なりの答えがわかった。「友達になること」、このシンプルな答えにたどり着くまでに、かなりの時間を要したが、もし隊員時代に戻れるなら、どうするか。

「あれだけ陸上競技に振り切ってやって、あれだけ悩んだから今がある。だから今戻っても変わらないと思います。でも、一つできるなら、厳しい指導者としてだけではなく、現地の人ともっと生活を共にして人間としてつき合うかな」

とはいえ、その思い残しが今の事業への愛とモチベーションにつながっているから結果オーライ、と笑う。

「何が成果なのか、それは自分が決めることではなく、派遣国の人が決めることです。渦中にいる時は、それを達観することは難しいので、とにかく一生懸命活動に取り組んで、悩み続けるしかない。答えを出そうと必死にもがくこと自体が、重要なのだと思います」

自分以外の人が来ればもっと幸せになれたのに

活動中に悩み続けたからこそ、後の

気づきで自分を変えることができたのが後藤さんなら、活動しながらどんどん自分が変えられていったというのが、96年、村落開発普及員（現在のコミュニティ開発）としてガーナに派遣された太田美帆さんだ。

太田さんが2年間の協力隊活動で造ったものは「ため池」「公衆トイレ」「中学校」。大きな成果を上げたにもかかわらず「他の人が来ていれば、あの村々はもっと幸せだったんじゃないかと思う」と控えめに話し始めた。

「赴任した時は乾期。水がなければ生きていけませんから、ため池を掘ることは必然でした。私が目指したのは、住民が主体性を発揮し、住民自身がオーナーシップを持って取り組む住民参加型のスタイル。ため池を手段に、いかに地域を良くしていくかを、住民自身が考えて実行していくことが目的でした。ところが『美帆の池だから美帆がやってよ』『池が崩れてきたから美帆が直してよ』とすべて私任せ。私が『みんなでやろう』と呼びかけても、『美帆は無能だから、予算も取ってこれないから、私たちにやらせようとする』と。あげく『前任者は何でもやってくれたのに』と前任者を引き合いに出される始末。それで、ため池はできたものの、私のやり方は正しいのか、方向性を見失ってしまったんです」

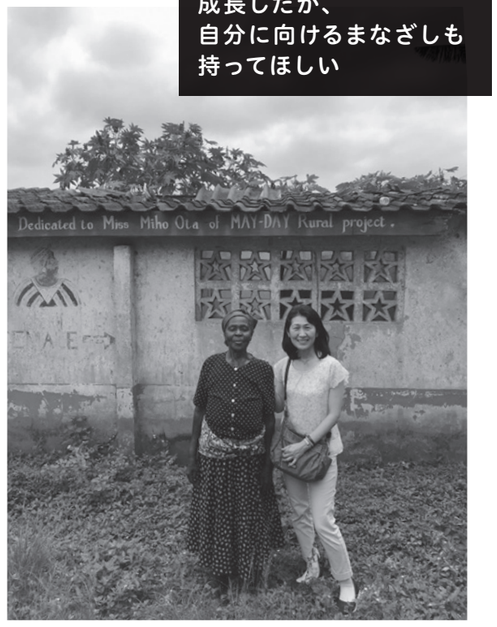
この村では常に前任者を賛美する声ばかり。これでは前任者の亡霊につぶされてしまう、そう思った太田さんは、郡内の約20ある村を巡り、地域の実態把握に努めた。その中の一つで「自分たちで何でもやるから来てほしい」と言ってくれたところが「公衆トイレ」を造った村だ。「若者のリーダーがいる元気な村で、皆で使える公衆トイレを造りたいとすぐに『トイレ建設委員会』を組織。設置場所を決めて穴を掘り、ブロックも一つ一つ手作りし、建設作業は住民総出で一緒にやり、完成式典も開催して盛大に祝いました」。

同時進行で、別の村で「中学校」を建てることにもなった。

「資材費だけ大使館の草の根無償資金協力の補助を受けて、あとは学区内の数カ村の住民を班分けして共同作業に出てきてもらい、基礎をならすところから全部自分たちで手作りしました。教室三つと職員室という簡素な学校ですが、企画段階から行政とも協力していたので公立学校と認められ、机やいすの支給がありましたし、教師も派遣してもらえました」

❶村人と公衆トイレの下の肥だめを掘る太田さん　❷1998年にできたばかりの公衆トイレの前で、村で母代わりだった友人と

何を学んだか、どれだけ成長したか、自分に向けるまなざしも持ってほしい



2022年、友人と再会。公衆トイレは朽ちながらも使われていた

3年後、25年後では任地の状況も変わる

トイレと学校が完成したところで任期終了。住民参加型を試行してみたけれど、今後はどうなるか？　後ろ髪を引かれながら2年の任期を終えて帰国。その3年後に、任地を訪れた太田さんは、予想外に嬉しい光景を目にした。

「ため池も中学校も使われていたんですが、私が何より嬉しかったのは、公衆トイレを建てた村です。トイレが使われ続けているだけでなく、その建設経験を応用して、住民たちが他の村も巻き込んで自分たちで小学校を建てていたんです。1年に1教室のペースで造っていて、すでに3教室できていました。あと3年で6教室できるんだと誇らしげに見せてくれました」

やはり住民主導で進めることに意義がある――。そう捉えた太田さんだったが、それから20年。再々訪した時に、また驚くことになる。

「25年前の公衆トイレがまだ使われていたんです。ガーナも経済発展したので、各家にトイレができていることを期待していたら、それは新住民の新しい家だけ。もといた住民は変わらず25年前の家に住み、家にはトイレがなく、朽ちてしまった公衆トイレを直すでもなく使い続けている。自分たちの力で小学校まで建てた村なのにと残念で」

生活は厳しいようだった。考えてみると当時村では、パイナップルの輸出で景気が良かった。ところが肥料の高騰や連作障害などで輸出品質を満たせなくなり、パイナップルが売れなくなっていた。一方で国は物価の上がるインフレに。かつてパイナップルで生計を立てていた旧住民らに、貧困が定着してしまった。

「協力隊員なら何とかして任地の生活を改善したいという思いがあると思いますが、マクロな世の中の流れもあって、ミクロな活動をする隊員の力ではどうしようもないところもあると思い知りました。いつ、どの段階で何を図り、成果とするのか、難しいです」

とはいえ、ため池も中学校もメンテナンスしながら使われていて、あの小さな村から、世界で活躍している卒業生も現れたそうだ。

自分は何もできない。学んで、自分が変わるしかない

有形のハコモノを造ったけれど、25年のスパンで考えると、それが成果といえるかどうか、太田さんは考え込む。

「協力隊の成果というのは、任地へのインパクトもさることながら、自分が何を学び、どれだけ成長したか、自分がどう変わったかということのほうがむしろ大事なのかもしれません。成果を上げようとして、相手を変えることに必死になり、相手を自分の理想に合わせようとしてしまいがちですけど」。相手を変えようとする前に、自分は果たして任地の状況を理解し、彼らに合わせられているだろうか。

「異国の地に飛び込んで、自分が任地から得たものは何だろうか、何を学んでどう変わったのか、自分に向けるまなざしも持ってほしいです」

太田さん自身は「自分は何もできない」ことを学んだ。「火をおこせない、バケツは頭で運べない、言葉も理解できない。できない、わからないことだらけで、村人にすべて教わるしかありませんでした。現地でぶつかり合いながらも、自分が柔軟になり、彼らの思考回路や文化を学び、受容する。自分が変わることで、やっと村人も心を開いてくれたように思います」。

自分が変われば相手も変わる。相互作用で、それが成果につながるのかもしれない。新たな自分を帰国後の人生で生かせれば、それが一番の成果ではないかと言う。

予算はありがたいけれど、成果に縛られる

太田さんが住民参加型にこだわったように、94年に村落開発普及員としてインドネシアに赴任した小國和子さんも、住民と一緒に活動していく「協働のプロセス」が大切、と話す。

小國さんの場合、95年から5カ年計画で開始された「協力隊員のチーム派遣」プロジェクトの最初の2年間の初代隊員として派遣された。年間200万円の事業予算を確保したプロジェクトであったことから、隊員は常時5、6名いて、引き継ぎ期間もしっかりある、村に通う公用車の予算もある、そういった手厚い状況だった。だからこそ、常に「目に見える事業成果」に縛られていたと語る。

「赴任直後の私の仕事は、5カ年プロジェクトの成果を測れるよう、ローカルな観点から指標を作ること。でも、そもそも何を指標とするのか、成果とは何かということを、全くつかめないままスタートを切りました」

とにかく1年目は「誘われたら断らない」をモットーに、村の「ローカルな」実態把握に努めた。

「村の人たちの生計向上を目的とする事業だったので、より深く人々の経済生活を理解し、かつ、調べるだけでなく実際に何か役に立つことができないかという志向になっていきました。そこで二つの村の女性たちに家計簿をつけてもらったり、みんなで集まって料理をしたりといった〝女性月例会〟のような取り組みを始めました。一つの村では、技術をつけるためにミシン講習会を受けたいという声が上がり、その実習も行いました」

しかし、女性月例会という目に見え

1996年、小國さんが村の女性たちを集めて行ったミシン教室

にくい活動では「プロジェクトの成果」とはいえないのではないか。小國さんはこの大きな課題に対して満足いく結果を出すために、無意識に「目に見える活動」に魅力を感じるようになった。

他の隊員たちが「バリ牛の肥育のための環境整備」や「乾期裏作のための優良品種の落花生の生産」など、説明しやすい活動に着手していたことも刺激になった。そこで小國さんは、住民からも要望があり、身近に成功事例があった「住民の手による水道敷設（ふせつ）」に取り掛かる。

「水道敷設は全くの素人でしたから、一つ一つのステップを住民と一緒にやろうと測定調査からスコップや部品の購入、穴掘り工事まで、測量や設計の技術のある隊員の力を借りながら、すべて共に取り組みました」

結果的に、女性月例会を細々と帰国直前まで続けつつも、後半は水道敷設が活動の中心になった。その後プロジェクトでは、同じ分野で複数人の隊員が派遣されて、実施方法を見直しながら、水道敷設を手がけることとなった。

水道敷設も関係づくりも どちらも大事な「経験」

赴任当時は「目に見える成果」を求めて水道敷設を行った。水道事業は「一番ではないかもしれないけれど確実に必要」というベーシックニーズであり、小國さん自身、着手することに抵抗も少なく、完成時の達成感も大きいものだった。一方、村の実態把握と女性たちとの関係づくりを中心とする個々の活動は、目に見えにくく成果としてはまとめにくい。しかし水道と同じぐらい小國さんにとっては大事な活動だったと言う。

「帰国後、毎年のようにインドネシアを再訪しました。集落内の貯水タンクに水が入っている音が聞こえると、泣くほど嬉しかったことを覚えています。しかし、その後、水道は老朽化し、タンクはモニュメント化していきました。そんな中、教えている大学の学生を連れて村を訪れたところ、かつて月例会の活動に参加していた女性の一人が『カズ（私の愛称）とミシンを学んだり、料理を作ったりしたのよ』と学生たちに話してくれました。正直、その時の私は水道敷設以外のこまごまとした活動をほとんど忘れていたので、彼女の口からそういった話が出てくるとは思いもよらず、感激しました」

水道のように「目に見えるもの」は、それが機能しなくなったり、不要になったりすると過去のものになるが、「自分が力をつけるために一緒に何かをやったこと」の記憶は何十年たっても残り続ける。「隊員としての活動が、いかに柔軟で等身大であることが重要か思い知らされました」。

だからこそ、一番大事なのは、その場にいる間の「協働のプロセス」と小國さんは言い切る。

「いわゆる事業の成果を測るという意味では、女性たちとの活動は場当たり的で測りにくいものでしたが、20年以上たって彼女たちが、そうやって語ってくれたことで、それが彼女たちの人生を豊かにする経験だったと知ったんです」

ここまでくると、逆転現象が起こる。最終的に水道敷設も女性たちとの活動も、どちらも協働のプロセスが大事だとわかったと言う。

「どちらにしても目の前にいる相手と良い関係を構築し、一つ一つのステップを大事にして、共に意思決定をしていく、そこをしっかりやっておけば、たとえ目に見える結果が〝失敗〟の状況だったとしても、自分にとっても住民にとっても、その後の人生の糧になっていくと思います」

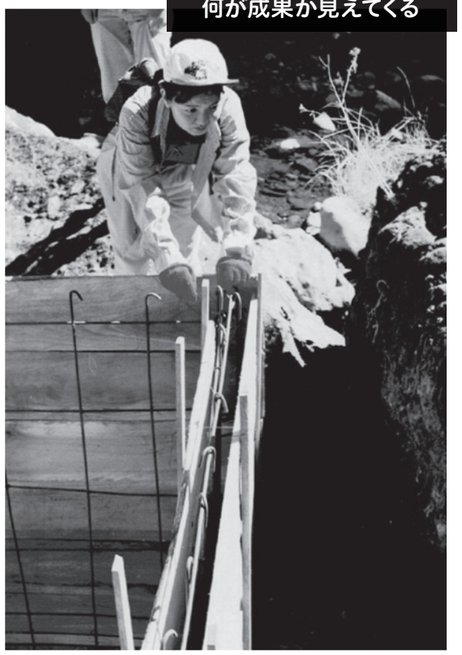
もしも目に見える成果を出さなければ、とプレッシャーを感じているなら、目の前にいる相手と5年、10年、20年と続く関係性を想像してみてほしいと小國さんはエールを送る。

「地域に関わる活動の場合、2年で成果を出さなければと思っているのは隊員のエゴでしかありません。2年で帰るのは隊員だけで、現地の人たちは次の日もその地での生活が続くわけですから。隊員は、自分との出会いを後からどんなふうに語ってもらえるかを考えながら、その時その時を大切に活動してほしいですね」

目の前の相手に自分という資源を生かしてもらうつもりで、できることをやることが結局は、自分も相手も大切にすることになる。

「自分との関わりが、相手にとっての支えや励みになって、その後の人生の選択につながるなら、それ以上の成果はないのではないでしょうか」

「協働のプロセス」を
大事にすれば、やがて
何が成果か見えてくる



1999年、育苗所の水道取水槽建設現場で作業する小國さん

Peningkatan Sarana Air Bersih

Latar Belakang

Proyek ini direncanakan berdasarkan hasil penelitian dasar dan musyawarah potensi di dusun yang dilaksanakan oleh bidang Pembangunan Desa. Hal tersebut telah dilaksanakan di 5 lokasi seperti gambaran di samping.

Memasang pipa

Air sampai di desa

Gambaran Umum

Dusun Daccipong Desa Anabanua
Tahun 96/97 untuk 44 Rumah
JICA Rp 19.000.000 Masyarakat Rp 1.000.000
Panjang Pipa 1000m

Dusun Pange Desa Palakka
Tahun 97/98 untuk 78 Rumah
JICA Rp 48.000.000 PMD Rp 8.500.000
Masyarakat Rp 3.200.000
Panjang Pipa 4200m

Dusun Pelleng Mallimpo Desa Tompo
Tahun 98 untuk 55 Rumah
JICA Rp.41.000.000 Masyarakat Rp1.000.000
Panjang Pipa 3100m

Dusun Camming Desa Palakka
Tahun 98 untuk 55 Rumah
JICA Rp 44.000.000 Masyarakat Rp 1.500.000
Panjang Pipa 2500m

Dusun Galung Desa Galung
Tahun 98/99 untuk 220 Rumah
JICA Rp 36.000.000 PMD Rp 8.000.000
Masyarakat Rp 4.000.000
Panjang Pipa 5800m

Kunci Proyek

Setiap proses mendapat persetujuan dan partisipasi oleh seluruh masyarakat setempat.

PROSES

Rencana: Membuka musyawarah untuk mendiskusikan cara pelaksanaan (hal yang dibicarakannya, misalnya jumlah dana dari masyarakat dan pemilihan koordinator untuk mengatur kegiatan, jadwal pelaksanaan , dan struktur sarana Air Bersih).

Pelaksanaan: Bahan-bahan yang ada di desa (seperti kerikil dan batu) disediakan oleh masyarakat. Pemasangan pipa dikerjakan oleh masyarakat secara gotong-royong.

Follow Up: Masyarakat membentuk panitia untuk pemeliharaan sarana air bersih dan menjamin kebersihan mata air dengan baik.

Kesan - Kesan

Kami masyarakat Galung pada umumnya merasakan betapa baiknya pembangunan sarana air bersih ini berkat kerja sama yang baik antara JICA dengan masyarakat, antara lain dari teknis pihak JICA, kemudian oleh masyarakat sebagai pemeran utama dalam pelaksanaan serta pemeliharaannya di kemudian hari.

Bapak M.Yahya
(Masyarakat Dusun Galung, Desa Galung)

プロジェクト成果をまとめたパンフレットの水道ページ（1999年）

失敗から学んだことは？

［現役隊員へのアドバイス］

歩くペースを合わせると見える世界が変わる

太田美帆さん

私の隊員時代はスマホもなく、村にどっぷりと漬かり、わからないことは村の人たちに聞くしかありませんでした。今はどの国でもスマホがあり、検索すれば何でもわかります。とはいえ、せっかく異国にいるのだからその国の時の流れや考え方に身を任せ、そこでしかできない経験をしてほしいと思います。ある先輩隊員の話です。「任地で日本のペースで歩くと、現地の人を皆、追い越してしまう。それに気づいて、現地のペースで歩いてみると、周りの人から声をかけられるようになった」と。現地の人と歩幅を合わせると、見える世界が変わってくるのです。ぜひそれを味わってください。

上から目線で日本式を押しつけないこと

磯野美子さん

「ヨシコ、ここはコスタリカなんだよ」。任地の教え子にそう言われた時に、自分がいかに上から目線で、日本式にやろうとしていたかを思い知らされました。例えば日本だと、集合時間5分前に集まるのは当たり前。でもコスタリカでは、雨が降ったら来ない。「どうせぬれるんだから、来るのは当然でしょ」と私は思って待ちますが、30分たっても誰も来ない。もう帰ろうかと思った頃に、一人だけ来たんですが、その一人に対して、「なんでこんなに遅いんだ」と怒ってしまった。でも褒めるべきなんですよね。遅れてでも来たのですから。そういう時に、日本式を押しつけていてはダメだと感じました。

持ち回り移動式の会合で現地理解を深める

小國和子さん

「女性月例会」のように定期的に集まって行う取り組みは、なかなか人が集まらず苦労するという話をよく聞きます。集会所や集落長の家で、という固定方式もあり得ましたが、私の場合は、現地理解を目的の一つとしていたこともあり、毎回、「次は誰の家でやる?」と声をかけて話し合って決めてもらいました。1回目はこの集落のAさんの家、2回目は隣の集落のBさんの家、と参加者たちが話し合うのを見聞きすることは、現地の人にとって「会合場所」がどのような条件で決まるのかや、メンバー間の関係性、リーダーシップなどを理解する一助となりました。活動初期などに試してみてください。

「課題」と「違い」を切り分けて考える

後藤大祐さん

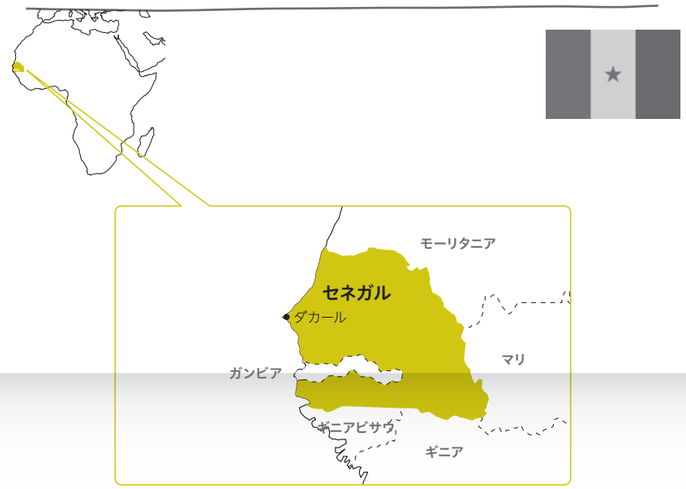
活動で何をすべきか悩んだ時、たくさん見つけたいろんな違いを「課題」と「違い」に切り分けてみてはどうでしょう。「課題」は何かしら解決すべき事柄。「違い」は解決すべきこともあるけれど、解決しなくてもいいこともある事柄です。解決しなくていい「違い」は、それが日本や自分のやり方であって任地とは違うという場合です。この場合は、日本のやり方を強いるものではありません。ゆっくり考えて切り分けてみると、活動の方向性を見いだせるかもしれません。活動内容のみならず、人と人としてのつき合いの中でも認め合えることができれば、それもまた活動に生きてくるかもしれませんね。

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈セネガル〉

サッカーの強豪国として知られ、人の良さやご飯のおいしさが魅力の国。
首都ダカールは欧米から西アフリカへの玄関口でもある。

セネガルの基礎知識



セネガル共和国

面　積：197,161平方キロメートル（日本の約半分）
人　口：1,732万人（2022年、世銀）
首　都：ダカール
民　族：ウォロフ、プル、セレールなど
言　語：フランス語（公用語）、ウォロフ語など各民族語
宗　教：イスラム教、キリスト教、伝統的宗教

※2023年9月19日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/senegal/data.html

派遣実績

派遣取極締結日：1979年4月18日
派遣取極締結地：東京
派遣開始　　：1980年10月
派遣隊員累計　：1,204人

※2023年11月30日現在
出典：国際協力機構（JICA）

平和を尊重する「テランガ（おもてなし）」の国 仏語圏西アフリカで最多の隊員を派遣

仏語圏アフリカ初の協力隊派遣国であるセネガルでは、1980年の派遣開始以来、1000名以上の隊員が活動してきた。国の歩みや協力隊事業の歴史を紹介する。

アフリカ大陸西端に位置する首都ダカール。かつてはパリ・ダカール・ラリーのゴール地点だったことでも知られる（写真提供＝JICAセネガル事務所）

＼ お話を伺ったのは ／

角 雄介（かど ゆうすけ）さん

PROFILE
セネガル／野菜栽培／2015年度2次隊・埼玉県出身
JICAセネガル事務所企画調査員（ボランティア事業）。大学卒業後、会社員などを経て、映像作品に楽曲提供を行う仕事に従事。協力隊に参加した大学の先輩を訪ねてブルキナファソに行き、協力隊に興味を持つ。アジア学院で1年間ボランティアを経験してから協力隊に参加。帰国後は青年海外協力隊事務局の国内協力員を経て、2021年より現職。

北はサハラ砂漠に、西は大西洋に面するセネガル。15世紀のポルトガル人到来を経てフランスの植民地となり、ダカール沖合のゴレ島は奴隷貿易の拠点になった。1960年にマリ連邦の一部としてフランスより独立した後に分離し、それ以来、アフリカでは数少ない安定した民主主義国家となっている。

セネガルはアフリカ諸国の中では民族数が少なく、南部カザマンス地方の独立問題を抱えるものの、民族間対立はほとんどない。イスラム教徒が約95％を占めるが、祝祭日がイスラム教とキリスト教由来の両方で設定されるなど、他宗教とも共存している。こうした根底には平和を尊重するセネガルの国民性があると話すのは、JICAセネガル事務所の企画調査員（ボランティア事業）である角 雄介さんだ。

「セネガルには、困った時に助け合う〝テランガ（ウォロフ語でおもてなしの意味）〟の文化があり、隊員もよくご飯をごちそうになります。また、あいさつを大切にし、『家族は元気？』『仕事はどう？』といろいろ尋ねてきます。答え方はさまざまですが、ウォロフ語で『ジャム（平和）・レック（だけ）』というのが何にでも対応できる返しです」

青年海外協力隊の派遣開始は80年で、初代隊員は野菜栽培、水産物加工、看護師の3名。以降、首都よりも農村・漁村中心に派遣されてきた。農産物の収穫量や水産物の水揚げ量の増大、栄養・衛生状態の改善のほか、環境保全や教育支援で活動し、技術協力プロジェクトや無償資金協力とも連携してきた。近年は就学前・初等中等教育や母子保健を中心とした地域医療、職業訓練、障害児・者支援といった分野のほか、2026年に首都ダカールでアフリカとしては始めて開催される第4回夏季ユースオリンピックに向けたスポーツ分野の派遣も増えている。

西アフリカ経済圏の地域拠点として経済特区の開発などを進め、経済も好調なセネガル。ただ、1人当たり所得は年間1500ドルを超え、最貧国を脱したものの、首都と地方の格差など、まだ多くの開発課題を抱え、協力隊へのニーズは高い。

「長年の協力の成果から、セネガルの政府や市民もJICAや協力隊の存在をよく知っており、『協力隊に来てもらえたらありがたい』と言われます」

セネガルは米が主食で、優しく真面目に仕事をする人も多く、活動しやすい国柄ではある。一方、停電や断水が珍しくなく、内陸部は時に気温40度を超えるなど過酷な環境下で、人々の生活には死も身近に存在する。日本の常識が通じないことに多く出会うと角さんは言う。

「人々の暮らしや考え方の背景を知ることが活動をスムーズにし、ストレスも抱えずに済むことにつながります。皆でお昼ご飯を囲み、その後はまったりしながら午後の暑さをしのぐ。そうした時間を大切にしてほしいですね」

Text＝工藤美和　写真提供＝ご協力いただいた各位

派遣国の横顔

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈セネガル〉

フランス刺しゅうのテーブルクロスにビーズで縁飾りをする横山さんの生徒たち。農村の生活改善を指導する公務員職のため、男性も少なくなかった

漁民の女性たちとマングローブの根元についたカキを採取する佐藤さん

横山真智子（よこやまちこ）さん

家政／2002年度1次隊・岐阜県出身

PROFILE

大学を卒業し、岐阜県の教員として中学校で家庭科を中心に6年間教えた後、現職教員特別参加制度を利用して協力隊に参加。小学校に復職後、休職して大学院で家庭科教育について研究。復職し小中学校勤務。大学院で博士号を取得し2023年から三重大学教育学部家政教育学科講師。「青年海外協力隊活動におけるものづくりの意義」などの論文がある。

佐藤良雄（さとうよしお）さん

養殖／1983年度2次隊・東京都出身

PROFILE

海洋系の大学で漁業資源の増殖を専攻し、就職する前に何かにチャレンジしたいと協力隊に参加。帰国後は沖縄でクルマエビ養殖会社や水族館に勤務した後、開発コンサルティング会社に所属し、各国で養殖指導などに当たった。

長い派遣の歴史が紡ぐ新たな絆

40年を超えて協力隊が派遣されてきたセネガル。課題を前に「自分に何ができるのか」と問い続ける姿は今も昔も変わらない。養殖、家政、小学校教育、看護師の隊員の活動を紹介する。

零細漁民を組織化し生ガキの販売ルートを切り開いた隊員

アフリカ大陸最西端のダカール市内、その突端のアルマディ岬には生ガキなど新鮮な魚介類を食べられる屋台が複数あり、セネガル人や欧米人観光客でにぎわう。実は、このカキ小屋の一つは40年前に青年海外協力隊員がダカールからはるか200キロ南のソコンの漁民たちと一緒に始めたもの。1983年に養殖隊員として派遣された佐藤良雄さんがその人だ。

配属先の水産局からの要請は、マングローブの根元につく天然のカキを採っている地元漁民に養殖技術を教えるというものだった。ただ、村に行ってみると、雨期に自給用の雑穀と換金用の落花生を栽培して乾期に漁業をする半農半漁が中心だった。そして、地元の人たちに生ガキを食べる習慣はなく、生ガキが高く売れることも知らない人が多かった。「最初に訪ねた村でカキを採っていたのは5人ほど。12月から4月の間、毎週土曜日に50キロほど離れた町で200～300ダースを販売して貴重な収入源となっていましたが、地方の町なので近隣にカキを食べる習慣がない事情もあり、それ以上の販売の拡大は望めませんでした。養殖という以前に商品化に力を入れなきゃいけないと思いました」と佐藤さんは話す。

大きな市場としては外国人が多い首都が考えられ、既にダカールへの生ガキ出荷を行っていた町のカキ漁業組合に買い取りを交渉するも、買いたたかれてしまった。自分たちで売るしかないと思い至った佐藤さんはカキ採集ができる村に「ダカールで生ガキを売ってみたい。協力してもらえないか」と働きかけ、試験販売に着手した。

水産局で出荷前の細菌検査を無料で行えるよう手配し、隊員支援のため置かれた駐在員事務所から借りたランドクルーザーに殻つきの生きたカキを積んで佐藤さん自らダカールまで運んだ（※）。出荷用の資材などは現地業務費で工面し、漁民2人と一緒にバイクに生ガキを積んでダカール市内のレストランやホテルを回って売り込んだ。

カキの価格は、小売りならば1ダース500CFAフラン（当時の日本円で約250円）、レストランなどへの卸は450CFAフランで、その時代の農家の下働きの日給と同等。最終的に、このシーズンの試験販売の売り上げは約40万CFAフランにもなった。漁民の負担が少なかったこともあり、みんながぜんやる気になった。佐藤さんは次シーズンからの本格販売に向け協同組合をつくり、4カ村43戸が参加した。

この地域のカキは小さく成長が遅い。まだ小さいカキは採らないこと、藻などがついて身入りの悪いものは避けること、出荷のためにカキを一つ一つ分けることなど、佐藤さんは採集や選別方法などを漁民たちに教えた。

一方で、ホテルやレストラン以外の販路としてアルマディ岬にカキ小屋を造り、ダカール市場内の販売スペースも購入した。さらに、販売の会計で不正がないように各村から販売員を1名出してもらい、佐藤さんは販売員のバイクの免許取得からダカールでの下宿先の手配まで世話をした。

貧しい漁民は現金があるといつの間にか使ってしまうことが多いため、組合員には出荷のたびに代金を支払うことはせず、半年のシーズン終了後にまとまった金額を渡すと伝えていた佐藤さん。販売期間中は毎日、売り上げを佐藤さんと販売員全員が電卓で計算し、村に戻る度に金額を報告した。

2回目のシーズンでは1万ダースを販売することができ、経費を差し引いた利益は組合員1人当たり平均約7万CFAフランに。舟を持っていない漁民は、木舟やそれに取りつける船外機を買う元手にした。

「赴任当初はセネガルでの生活に慣れるのに精いっぱいで、〝ここで暮らしていける〟と思えるまで1年かかりました。それからは何でもやりましたが、縁もゆかりもない外国人を受け入れてよくついてきてくれたなあと思います」

一緒に舟に乗り、作業用の籠編みをし、ウォロフ語でおしゃべりを楽しむなど佐藤さんは漁民たちと多くの時間を共に過ごし、任期を延長。誠実につき合った3年8カ月の成果だった。

その後、2004年までに約10人のカキ養殖隊員が赴任し、組合の組織強化やカキ養殖の普及、天然カキの生育環境を維持するための環境教育などを行った。最後の養殖隊員が去ってから約20年。今もソコンのカキ組合はカキの一部を養殖ガキで賄い、ダカールへの出荷を続けている。

家政職業訓練校で技術指導員候補生の優秀さに驚く

セネガルでは村落での農業以外の産業振興や貧困層の収入創出を図るために職業訓練に力を入れてきた歴史がある。横山さんは、家政隊員として2002年からダカールにある国立社会家族経済教

アルマディ岬のカキ小屋と、カキ販売用のバイク（写真は佐藤さんの後任隊員の時代のもの）

※当時は、協力隊員が自動車やオートバイを運転することが認められていた。

活動の舞台裏

サッカーを通じて深めたセネガルとのつながり

2016年から小学校教育隊員として活動した松尾雄大さんは、小学生時代から続けていたサッカーを通じ、任地に溶け込んだ。セネガルはFIFAのランキングではアフリカ圏で1位と、サッカーが最も人気のあるスポーツ。「赴任したその日から近所の子どもたちとボールを蹴っていました」。地域チームの選手、コーチを務めたほか、新たに少年サッカーチームを立ち上げて監督としても活動した。

2018年にセネガルで行われたブラインドサッカー交流イベントにて

2018年のFIFA ワールドカップの時、日本とセネガルとの対戦記念に行われたブラインドサッカー交流プログラムで協力隊チームのリーダーを担当したことが、人生を変えた。それまでは障害者スポーツに特別な関心はなく、障害者は支援される存在でどう接したらよいのかわからない、と思っていたというが、「実際にアイマスクをしてブラインドフットボールの練習に参加してみると、選手に全くかなわないんです。『障害』への意識が完全に変わり、セネガルのブラインドフットボール選手たちと友人になったことで、障害問題は〝自分ごと〟になりました」。

帰国後は日本ブラインドサッカー協会勤務を経て、同じセネガル隊員の左近浩太郎（旧姓 山本）さん（小学校教育／2016年度1次隊）と一般社団法人『WITH PEER』を設立。「セネガルと日本で障害者スポーツを通じて障害課題を解決する仲間（＝PEER）を集め、共生社会の実現を目指しています」。

派遣国の横顔

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈セネガル〉

賣野由紀子（うりのゆきこ）さん

看護師／2022年度3次隊・神奈川県出身

PROFILE

アフリカでの国際協力に憧れ、2006年、日本の大学在学中に交換留学でダカール大学にて1年間学ぶ。その時に協力隊の看護師・助産師の活動を見学し、母子保健での貢献を決意。大学卒業後、製薬会社に医薬情報担当者として勤務しながら学費をため、短大に進学し看護師資格を取得。さらに看護師として3年の病院勤務の後に修士課程で助産師資格を取得し、2年半の産婦人科病棟勤務を経て協力隊に参加。

地域で赤ちゃんの体重測定を行う賣野さん

「静かにしよう」と壁に貼った絵を示して指示する教師。松尾さんは生徒にわかりやすいよう、掲示物や指示方法を工夫することを提案した

松尾雄大（まつおゆうだい）さん

小学校教育／2016年度2次隊・福岡県出身

PROFILE

大学の教育学部在学中に1年間休学し、バックパッカーとして世界一周しながら、サッカーを通じて各地の子どもと交流する。復学して小学校教諭免許・特別支援学校教諭免許を取得し、新卒で協力隊に参加。帰国後、日本ブラインドサッカー協会に就職して国内外での普及活動に携わる。2020年4月に一般社団法人「WITH PEER」を共同創設。22年からセネガルでの活動を本格化。

育学校（ENFEFS）で手工芸教育に携わり、その一翼を担った。

ENFEFSは職業訓練校の指導員を養成する国内唯一の学校で、中学3年生以上の生徒がレストランやホテルに就職するための資格を取る専門課程や、地方の農村部で女性の生活改善に当たる指導員の養成課程、指導員資格を取得した人が進める女性技術教育センターの教員養成課程があった。

横山さんへの要請は、セネガル人教師と共にかぎ針編み物やフランス刺しゅう、ビーズ小物、マクラメなど一般的にニーズのある手工芸を教え、デザインや材料、手法に関する新たなアイデアを提供すること。各課程のレベルに応じた授業を行った。

印象に残っているのは生徒たちが高い修得能力を持っていたことだ。まだ年齢層の低い専門課程の1年生には編み方の名称や針と糸の持ち方など実演しながら丁寧に教えなければならなかったが、それに比べ、指導員養成課程や教員養成課程では教える労力は少なくて済んだ。指導員は国家公務員のため人気が高く、養成課程には中学修了後の選抜試験に合格した人材が全国から集まっていたからだ。

「私のフランス語での説明が多少下手でも、1人の生徒が理解すれば、その生徒が他の生徒にちゃんと伝えることで全員が理解できました」。おかげで装飾的にひもを結んでつり籠などを作るマクラメなどでも、すぐに応用に進められた。教員養成課程にマクラメが得意な生徒がいて、教師に代わって応用作品を指導することもあった。生徒は自分の好きなように技術を組み合わせオリジナリティある作品を作っていった。

長期休暇には、横山さんはバスを乗り継いで地方出身の生徒の家を訪ね、その高い修得能力の背景を知った。

「村落地域では紙が貴重で、小学校では教科書やノートを使用せず、先生が黒板に書いたことを個人用の小さな黒板にチョークで写し、次を書くためにすぐ消す。あまり記録しなくても学んだことを理解し覚えられる子が自然にふるい分けられ、入学・進学しているようでした」。さらに、フランス語やウォロフ語、アラビア語など複数の言語を理解できる生徒が何人もいて、耳から入る情報に強く、セネガル人が文字ではなく口伝で文化を継承してきたことにも納得がいった。その半面、文字や絵を書いたり、記録物を読んで理解したりすることは弱いと感じられた。

伝統あるセネガル刺しゅうも口伝という。ENFEFSには教えられる教師がいなかったため、横山さんは残された作品から図案を取り、刺し方などを生徒に教えるという体験もした。

「日本人の私がセネガルの伝統的な刺しゅうを教えるのは不思議な状況でした。そして、日本のように、子どもの頃から日記を書いたり本を読んだりすることで培われる能力の大切さも改めて感じました」

現地のベテラン教師をモデルに算数授業を改善

セネガルでは1990年に60%だった初等教育就学率が2010年には90%に向上したが、急速な就学者の増加に対応するために教員養成課程が4年間から9カ月へと短縮された結果、教員の質の低下が課題となっている。セネガル南西部のカオラック県ンドファン市で、小学校教員の指導力向上を目的に算数の授業改善に取り組んだのが松尾雄大さんだ。

市内の小学校では1学年に約100人の生徒がおり、2クラスに分けて教えているのはまだいいほうだった。一つの教室に生徒がひしめき合い、教室が足りず、青空教室で学ぶ姿もあった。授業は教師が教科書の内容を説明して問題を解かせる一方的なものが多く、理解できない生徒は集中力が続かず騒いでしまう。大勢の生徒を静かにさせるために教師がむちを使うことも、頭ごなしに否定するのは難しいのではないかとさえ感じさせる状態だった。

松尾さんは巡回先の学校の授業に立ち会い、授業後には意見交換をして、教員を集めた研修会などでさまざまな改善提案をしていった。

児童の算数力アップに直接つながるものとして提案したのは、かけ算の歌や百マス計算の導入など。また、教授法全般についても、板書の仕方に始まり、教材の活用法、教室内のルールを保つための掲示板の活用方法、授業案の組み立て方、生徒たちに伝わりやすい発問の仕方まで大学で学んだことを基に教師たちに提案した。

特別支援学校の免許も取得していた松尾さんは、すべての生徒にわかりやすく伝えることにも配慮した。例えば、おしゃべりをやめて静かにするようにという指示をイラストで視覚化して先生が指さすようにすることや、数の概念を教える際にいきなり数字を示すのではなく石や葉っぱなどの身近な具体物を触ることから始めることなどだ。

しかし、赴任後1年近くたっても教師たちの反応はいま一つで、授業のやり方はあまり変わらなかった。

悩んだ松尾さんが気づいたのは、教師たちが教員となるための教育をきちんと受けられなかったため松尾さんの提案内容への理解が進まず、自分たちが受けた教育と同じようにしか教えられないということだった。

ただ、そのような教師たちの中に一人だけ素晴らしい授業を行うベテランの先生がいた。授業案がしっかりと構成されており、前回の復習から始める導入、個人ワーク、グループワーク、最後の振り返りまできちんと進めるわかりやすく、生徒たちを引きつける話し方をし、生徒の様子を見ながら上手に授業を展開させていく。むちを使うことは全くなく、生徒たちからの信頼もあった。

松尾さんは、「セネガル人の先生なら教師たちにとって身近なはず。その先生の授業をモデルにして見てもらうことが一番いい改善方法になるのでは」と考えた。そこで授業の様子を映像化し、それを題材にした研修会を県教育委員会に提案、実現させていった。

「モデル授業から教授法を学んだ先生の授業で子どもたちがすごく楽しそうにしていたのが印象に残っています」

母子の健康向上のために就労支援や性教育に取り組む

セネガルの妊産婦死亡率や5歳未満児死亡率は、SDGs（持続可能な開発目標）が目指す値と大きな隔たりがあり、母子保健の改善は依然として大きな課題となっている。そうした背景の下、2023年1月から活動しているのが看護師隊員の賣野由紀子さんだ。

配属先は、首都ダカールから北に140キロの半砂漠地帯にあるルーガ州ケベメール県ケベメール市と周辺地域から成る保健区。区内には保健センター（医師が最低1人はいる施設）や保健ポスト（看護師や伝統的産婆、無資格の地域医療スタッフで運営される医療施設）があるものの、医療従事者が不足していて、地域住民の保健衛生までカバーするのは難しい。賣野さんには、住民の健康管理・保健衛生の啓発活動を担う地域保健員や保健ポストをサポートしながら、母子の健康をめぐる課題に取り組むことが求められている。

ある日、賣野さんは保健ポストに受診に来た女性の姿に驚いた。産後1カ月で体重は32キロまで痩せてしまっていた。母乳も満足に出ないこと、抱いている赤ん坊も低栄養になることが助産師をしてきた賣野さんには容易に想像がつき、話を聞いてみると、出産後に離婚され、頼りの実家も母親しかおらず経済的に厳しいということだった。そして、地域には同じような境遇の女性が他にも少なからずいることを保健ポストの長から聞いた。

家庭の事情や学校の成績の問題で、高校まで無事に進学できること自体が当たり前ではないセネガル。中でも、賣野さんは若年での結婚・妊娠によって学業を中断する女の子たちが気になった。「夫に経済的に依存する女性も多く、夫がけがや病気で働けなくなったり、離婚したりした場合、あっという間に貧困に陥ってしまう。そのため、地域保健員が低栄養の母子に栄養について教えたところで、栄養のある食べ物を買うことができないんです」。

そんな女性たちを何とかしたいと考

ケベサックの製作に携わる女性たちとのミーティング。右手前が賣野さん

えた賣野さん。巡り合ったのが「ケベサック」（ケベメールと、フランス語で鞄（かばん）を意味するＳａｃを合わせた名称）だ。地元の女性グループが経済的自立のために作っているアフリカ布のバッグのことで、実は04年にこの地に赴任した村落開発普及員隊員の活動から始まったものである。グループの名前はJIGEEN NU FARLU（ウォロフ語で、仕事へのやる気があふれる女性たちという意味）。色鮮やかな布を使うことで外国人などの土産物として人気になり、日本で行われるアフリカン・フェスタなどでも販売されてきた。

06年にダカール大学に留学していた賣野さんもケベサックの活動を見聞きしていた。協力隊員としての赴任後、町中で賣野さんら隊員の姿を見て声をかけてきた女性がまさにケベサックのメンバーだった。アトリエに案内してもらうと、コロナ禍で活動は中断していたものの、「日本人ともう一度始めたい」と言われた。

賣野さんはケベサックの再開を図り、同時に、困窮している女性にここでミシンの使い方などの職業訓練を行い、生活向上、ひいては母子の健康向上につなげたいと着想。保健ポストなどで、本当に支援の必要な困窮者のふるい分けを行いつつ、同じ任地の隊員と一緒にケベサックの店舗整備や商品作りを支援し始めた。

一方、若年妊娠については、中学校の上級学年まで性教育の機会がないことも一因と考え、小学校教育隊員と一緒に、小学校での性教育授業を行う準備を進めている。

留学時代と比べてはるかにインターネットが進化した今、賣野さんはケベサックを立ち上げた隊員をはじめ多くのセネガルＯＶとＳＮＳなどでつながり、精力的にアドバイスを仰ぐ。

「セネガルのために奮闘された先輩たちの話を聞くと、とても勇気づけられます。任期はあとちょうど1年。うまくいかないこともいろいろ出てくるでしょうが、自分なりにできることを地道に積み重ねていくつもりです」

活動の舞台裏

日本よりも便利な電子マネーサービス

「留学で滞在した17年前はダカールでさえ頻繁に停電や断水があったのに、今は地方都市のケベメールでもその回数がはるかに少ないし、インフラ整備がとても進んだことを感じます。何といっても電子マネーの普及にびっくりしています」と賣野由紀子さん。

サブサハラ・アフリカでは個人の銀行口座を持っている人が少ない一方、スマートフォンを持っている人が増えたため、近年、銀行口座を介さない決済サービスが普及している。現金をスマートフォンや携帯電話に

電子マネーの引き出しや預け入れができる店舗

チャージして支払いができるだけではなく、窓口で現金を受け取ることもできる。

首都や州都などには銀行やATMがあるものの、隊員の任地にはない場合が多く、「手持ちの現金が少なくなった場合、かつては州都にお金を引き出しに行くまで生活を切り詰めるしかなかったでしょう。今は近所の専用店舗へ行くだけで現金が手に入るのでとても便利です」

協力隊を経て、今セネガルに拠点を置いて活動する松尾雄大さんも、この数年で急速に普及したと話す。「お金を安全に管理できるのはいいですよね。その半面、小銭を持たない人が増えると、道端にいる物乞いの人の収入減になったりしないかなとも考えてしまいます」

いま、読みたい電子書籍

暇と退屈の倫理学

著　：國分功一郎
発行：新潮社

https://www.shinchosha.co.jp/book/103541/

この方に聞きました！

推薦者
井上（いのうえ） 真（まこと） さん
パブアニューギニア／システムエンジニア／1998年度3次隊・千葉県出身
NEXT BUSINESS INSIGHTS編集長

何でも与えられがちな社会に突き詰めて読みたい一冊

開発コンサルティング事業を行うアイ・シー・ネット株式会社に所属し、経営戦略部ブランドコミュニケーション室室長として開発途上国とSDGs、ビジネスをテーマにしたオウンドメディア「NEXT BUSINESS INSIGHTS」を立ち上げた井上 真さん。

自他共に認める読書家でもある井上さんお薦めの一冊は、現代社会の分析や考察を行う哲学者、國分功一郎の著作『暇と退屈の倫理学』。スピノザ、ルソー、ニーチェをはじめとする多くの哲学者の教えを著者が読み解きながら、「暇」とは何か、人間はいつから「退屈」しているかといった人生の問いを考察し、現代社会の問題点を指摘したベストセラーだ。

タイトルから難解な印象を受けるかもしれないが、例えば、第二章「暇と退屈の系譜学」では、遊動生活(※)から定住生活への人類史を例に、定住を始めた人間が、退屈を回避する必要に迫られるようになった理由を考察するなど、身近な例でわかりやすい。井上さんも、「自分の中の漠然とした疑問を言語化してくれたり、何となく使っている言葉を明確にしてくれたり、読めば読むほど発見がある」と、何度も読み返しているという。

「『暇』とは？『退屈』とは？ というこの本のテーマについての考察が興味深く、議論のネタが山ほど詰まっているので、知的好奇心をくすぐられ誰かと話したくなること間違いなしです。また、著者は『人間が豊かに生きるとはどういうことか』と読者に問いかけているとも思います。私も隊員経験を通じて、途上国の人は日本より豊かな暮らしをしているのではないか、そもそも豊かさとは何か、と深く考えるようになって人生観が変わりました。豊かさや支援の在り方について考えを深める一助になると思います」

この一冊を何度も繰り返し読むことで、単に知識を得るだけでなく、物事を突き詰めて考える思考法のトレーニングにもなるそうだ。

実用書ではなくあえて哲学書を選んだ井上さん。何でも提供され、むしろ消費させられている情報社会で、それに追われるだけになってしまってはいないか。思索にふけり語り合うことで得た気づきを生き方のヒントにしてほしい、とのことである。

※遊動生活…移動しながら生きていく生活のこと

Text＝海原美帆　Photo＝干川 修（書影）　写真提供＝井上 真さん

専門家に聞きました！

失敗に学ぶ

現地で役立つ人間関係のコツ

今月のテーマ：現地の人へのスポーツ指導

今月のお悩み

コミュニケーションの壁により、指導に苦慮しています

（中南米／男性）

スポーツ系の隊員として活動を始めて数カ月たつのですが、現地のなまりが訓練所で学んだ言葉とかなり違っていることもあって、語学力はまだ不十分。

そこで、私がやってみせて見本を示すなどの方法で取り組んでいますが、それだけでは思うように意図が伝わらないと感じる場面もあり、もどかしい思いもあります。今後、活動の本格化に向け、何に力を入れ、どうやって指導すればいいか頭を悩ませる日々です。

今月の教える人　堤 尚彦（つつみ なおひこ）さん

ジンバブエ／野球／1995年度2次隊、ガーナ／プログラムオフィサー／1998年度9次隊・兵庫県出身

新卒で協力隊に参加。ジンバブエのスポーツ・リクリエーション省スポーツ・リクリエーション部に配属され、野球隊員として学校での巡回指導や指導者の育成に取り組んだ。帰国後、大学院在学中に再び協力隊員としてガーナへ赴任し、代表チームの強化に当たる。2000年から国内のスポーツマネジメント会社に勤めた後、06年、おかやま山陽高等学校へ移って野球部監督に就任。17年、チームを甲子園初出場に導き、23年には8強入りを果たした。会社員や教員の傍ら、03年にインドネシア代表コーチを、18〜19年にジンバブエ代表監督をそれぞれ務めるなど、「世界に野球を広める」という目標に向けた取り組みも続けている。

堤先生からのアドバイス

不得手でも粘り強く話せば、いずれ実を結ぶはず。言語以外の伝え方を探るのも一手です

私の場合、ジンバブエでの活動言語は、現地でベーシックな英語だったのですが、語学が苦手だった私は赴任当初の数カ月ほど、英語がろくに話せない時期が続きました。あいさつやお礼などの簡単な言葉以外は、とにかく笑顔を見せて何とかコミュニケーションを取っていたような状態です。それでも、遠い異国に一人でやって来た孤独感もあって積極的に人々と交流していたのですが、語学ができないが故の事件もありました。

当時、配属先のスポーツ・リクリエーション省で私の活動に関する計画が何もなく、担当者も不在がちなので、独自に近隣の学校を訪ねたりしていました。その活動に担当者の横やりが入り、しかし相変わらず活動計画の相談に応じてもらえない状況で、私が彼の机に残したのが、〈Please don't disturb my job〉というメモ。ホテルの扉にかける清掃不要の札を参考に「自分で活動するので、どうぞお構いなく」という程度に伝えたつもりだったのですが、語学が堪能な人なら分かるとおり、実際には「邪魔をするな！」といった強い意味になってしまいます。

その結果、担当者が激怒して省のトップやJICA事務所まで巻き込む大問題に。私のほうも、元はといえば担当者に原因があるのだと意地になり、一時は活動の継続が危ぶまれる事態にまで発展しました。最終的には、私の活動を手伝ってくれていたモーリス・バンダという青年に「野球をやりたい子どもたちのためにも、おまえが頭を下げろよ！」と怒られた私が担当者に謝るという決着になったのですが、言葉一つで思いがけず痛い目を見ることもあるのだと自覚しました。

その後、私の語学力が飛躍的に伸びたのは、この時に腹を割ったモーリスとの関わりがきっかけでした。彼とはしょっちゅう意見をぶつけ合ってケンカもする仲だったのですが、私はまだ、限られた語彙（ごい）の中から言葉を選びつつ、何とか意思を主張する程度。そんなある日、例によってモーリスと言い合っていると、突然、私の口から流ちょうな英語の悪口（！）が湯水のごとく流れ出してきたのです。モーリスも「え、おまえ今、何語しゃべった？」と驚き、お互いに目を丸くしてしまいました。

その時を境に、だいぶスムーズに英会話ができるようになりました。きっと耳から入ってたまっていた情報が一気に出たのでしょうが、特定の相手を決めて、下手でも諦めずにコミュニケーションを続けるのは効果があったのかもしれません。

もっとも、協力隊や海外のナショナルチームへの派遣でスポーツ指導に携わってきた経験からいえば、そもそも言葉にあまり頼るべきではないという考え方もあります。

例えば、歩いた経験のない人に言葉だけで歩き方を教えるなら、どう説明すればよいでしょう？実は、体を動かす時に脳で動作を考えるということはすごく邪魔で、体の反射だけで教えたほうがいいんです。私たちも歩くのにいちいち脳を使って考えたりしませんし、ペンなどの道具を使う場合も、頭の中で「これくらいの角度や筆圧で…」などと考えたりもしないはずです。

私も当初は、野球を見たこともないジンバブエの小学生を相手に捕球や投球などの動作を言葉で教えようとしていました。すると、みんなロボコップのようにぎこちない動きになってしまうので、頭を抱えました。

そこで思いついたのが、小さな柔らかいボールをドッジボールのように投げあう〝バンティング・ゲーム〟です。人間役の子に、ライオン役へ向かってボールを投げ当てさせると、スパーン！ときれいなフォームで投げるんです。その瞬間、その子の意識は相手に当てることだけに向いていて、投げ方のことなんて全く頭にないですよね。

そんな経験もあって、高校野球の監督となった今でも、コーチ陣が「もっとこんな動きで、こうやったほうがうまくなる」と言うのを、何か自然な動作に落とし込んで伝えられないかな、と考えたりしています。

どのような手段を使うにせよ、相手に物事を伝えたいという気持ちを持って、その方法を粘り強く工夫することで、道は開けるはずです。

Text&Photo=飯渕一樹（本誌）

この職種の先輩隊員に注目！

現場で見つけた仕事図鑑

#0027

「家政・生活改善」

分　　類：人的資源
派 遣 中：9人（累計：651人）
類似職種：コミュニティ開発、マーケティング、野菜栽培、食品加工、手工芸、料理、栄養士

※人数は2023年11月末現在

CASE 1

先住民が大半を占める地域で女性や子どもの栄養改善

金森知美（かなもりともみ）さん
グアテマラ／2017年度3次隊・東京都出身

PROFILE
大学生時代、国内外のワークキャンプに参加したことで、子どもたちとの交流や、各国の実情を知ることに興味を覚えた。バングラデシュとザンビアで栄養改善に取り組む財団でインターンを経験後、大学で学んだ管理栄養士の知識を生かしたいと新卒で協力隊へ参加。帰国後も国際的な栄養改善に関わる業務に従事している。

配 属 先：ウスパンタン市役所
要請内容：市の食と栄養の安全保障及び地域経済発展課の職員と共に市内の女性・女子の栄養状況の調査・診断を手伝い、妊産婦・乳幼児の栄養摂取についての研修会の立案・実施を支援する。また、身近な食材を使ったレシピ、疾病予防対策の紹介をする。

赴任 → 中盤 → 帰国

「家政・生活改善」隊員は、女性や子どもを含めた人々の生活が、家庭や地域全体で向上していくように、衣食住や暮らしの改善などに取り組む。

食や被服、農業に関する知識や技術が求められ、栄養士や調理師、家庭科教員などの資格があれば活動に役立つが、そうした資格不要の要請もある。

CASE 1

赤・黄・緑の「三色食品群」活用 健康的な食事を印象に残す

金森知美さんが活動したのは、マヤ系先住民が人口の大半を占めるグアテマラ中央部キチェ県。ウスパンタン市役所に配属され、女性や子どもたちの食生活や栄養状況の改善に取り組んだ。

調べてみると、トウモロコシや豆は栽培している家庭が多く、市場では野菜や果物が売られていた。しかし、摂取する食材の偏りが大きく、それが栄養不良につながっていた。低栄養による発育阻害で、年齢に見合わない低身長の子も多かった。

「住民たちは毎食、トウモロコシの粉を練って平たく焼き上げたトルティーヤを食べていました。それを5、6枚食べるのが普通でしたが、おかずはわずかで、炭水化物過多でした」

金森さんは「健康的な食事とはどういうものか、イメージを持ってもらえば現地の人の印象に残るだろう」と考えた。そこで活用したのが、食品を「赤」「黄」「緑」に分ける「三色食品群」だった。「赤」は、体を作る基になる肉や魚、豆、卵など、「黄」にはエネルギーの基になる米やパン、イモ類など、「緑」は体の調子を整える野菜、果物、キノコ類などが含まれる。3色を取れば、バランスの良い食事になる。

コミュニティ巡回の機会を増やそうと、助産師隊員が関わる妊産婦向けの研修や知り合いになった教員の小学校なども訪問し、「三色食品群」を広めていった。これは地域住民や子どもたちと直接触れ合う良い機会となった。

「野菜は緑」と知っている人もいれば、「トルティーヤは緑じゃないんだ」と驚く人もいた。金森さんはより印象に残すため、日本文化の紹介も兼ねて、和食の基本「一汁三菜」（※）の紹介もしながら、健康的な食事の大切さを伝えて回った。

CASE 2

各農家で食品乾燥ネット自作 乾燥野菜のおいしさを広める

病院で栄養士として働いていた髙橋いづみさんは、ザンビアの首都ルサカに程近い郡の農業事務所で、食品加工を通じて栄養改善に取り組んだ。

現地は、作物を育てることができる雨期（12～4月）と、雨が降らず作物が作れない乾期（5～11月）に分かれている。乾期の終盤では、食べるものに困る農家もいた。

「灌漑（かんがい）設備もないため、乾期の終わりに食べ物が不足する一方、マンゴーなどの収穫期には、採り切れない果実が地面に落ちたりしていました」

そうした無駄をなくすために作物を加工して保存することを考え、特に乾燥野菜作りに力を入れた。髙橋さんの着任前にも野菜を乾燥させる取り組みはあったが、麻袋の上に並べていたので、砂をかぶったり、家畜に食べられてしまったりで、うまくいっていなかった。

そこで髙橋さんが取り入れたのが、乾燥ネットだった。鳥籠より少し大きい円柱型のネットを各農家で自作してもらい、その中にマンゴーやトマト、バナナを入れて乾燥させる。木からつるせば、風も通り、家畜による被害も防げる。二段底にして効率も高めた。しかも、乾燥させるとおいしくなる上、高くなる栄養素もある。

「各地でワークショップを開き、乾燥野菜の作り方と調理方法を計約120人に紹介しました。その結果、『ほとんどの農家が乾燥野菜を作っているよ』と聞き、その普及ぶりが嬉しかったです」

大豆や落花生、米などの種を渡して、生産と収穫、種の入手までのサイクルを作ることに挑戦する農家もあった。

とはいえ、卵や肉などタンパク質の摂取にはやはり現金収入が必要だと感じた髙橋さんは、乾燥野菜を販売できないか模索しつつ、ワークショップに他の隊員を招き、マーケティングやビジネスプランの話もしてもらった。

最大のピンチ

着任から1年がたっても、研修や家庭訪問の件数が延びませんでした。管理職であるカウンターパート（以下、CP）に「こういうところに行きたい」と言えば実現するものの、CPがいない時に職員に頼んでもあまり動いてくれず、彼らに不信感を持ち始めました。選挙で市長が代わり、ボランティアの位置づけが変わったことも影響していたようです。配属先以外の人と連携して動く許可をもらい、他の隊員や知り合いになった教員のつながりで研修会や学校に訪れるようになり、状況が良くなりました。

最高のやりがい

マヤ系先住民のコミュニティで三色食品群について紹介した

子どもたちに三色食品群を覚えてもらうため、塗り絵を使いました。絵の中に食品の名前を書き込んでおき、米なら黄色、肉なら赤というように、当てはまる食品群の色を塗ってもらうのです。きっかけは、もともと学校で塗り絵を使った宿題が多く出されていたことでした。狙いどおり、子どもたちは夢中になって色を考えて塗り、「見て、見て」「これ、何色なの」と楽しんでやってくれたので、嬉しかったです。

CASE 2

乾期の食料不足解消へ 食品加工を通じて貢献

髙橋（たかはし）いづみさん
ザンビア／2017年度3次隊・滋賀県出身

PROFILE
小学校の担任の先生が読んでくれた『世界がもし100人の村だったら』で、きれいな水が飲めない人、教育を受けられない人など、世界には多くの困っている人々がいるという事実に衝撃を受けた。短大で栄養士の勉強をしながらフィリピンのスタディツアーに参加し、貧困を目の当たりにした。病院に就職後、効率を重視するあまり食品や水を無駄にする職場と現地とのギャップを思い出し、協力隊に参加した。

配 属 先：ルサカ州農業事務所（チランガ郡農業事務所）
要請内容：首都ルサカ近郊のチランガ郡で、同僚と一緒に農村を巡回しながら村に暮らす人々を対象に栄養・生活改善活動を行う。特定の栽培知識・経験は必要なく、農業、料理、営業などの知識や経験を生かして活動する。

赴任 → 序盤 → 中盤 → 帰国

最大のピンチ

着任から半年余り過ぎた頃、ワークショップに人が集まらず、悩みました。4～5人の時もあり、「興味がないのかな、来たくないのかな」とネガティブに捉えていました。そこで、村ごとに実施する曜日、時間を固定することと、その村を担当している配属先の農業普及員に「前日に再度、SNSでリマインドしよう」と提案しました。やってみると、多い時は参加者が30人にもなりました。やがて、私が前日のリマインドをし忘れていると、普及員から催促されるまでになりました。

最高のやりがい

それまで乾燥させる習慣がなかった野菜も食べるようになるのか、気になっていました。脂質や塩分の取り過ぎの傾向もあったので、ワークショップでは、乾燥野菜を煮たり、蒸したりする料理の紹介もしました。「油がなくてもおいしい」「塩を入れなくても素材の味がする」などと好評で、マンゴー、トマト、バナナのほか、オクラやカボチャ、タマネギなど、何でも乾燥させて食べるようになってくれました。そのまま定着してくれることを願っています。

自作した乾燥ネットで野菜を乾燥させる農家の女性たち

※一汁三菜…主食・汁物・三菜（主菜1品・副菜2品）で構成した献立。

Text＝三澤一孔　写真提供＝金森知美さん、髙橋いづみさん

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり＆アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

最も簡単なたたき染めで藍染めに挑戦してみよう

エルサルバドルの農業協力機構に赴任し、その工房でさまざまな染色の授業を行うだけでなく、地域の女性グループや子どもたちなどにも広く染めや織りを紹介した森永真弓さんに、今回は藍染めを教えてもらいました。

「藍染めは、アジアや中東、アフリカ、中南米など、世界中で古くから行われてきた文化です。本格的な藍染めでは原料を発酵させるのですが、発酵させずに染める生葉染めもあります。今回は最もシンプルな方法であるたたき染めを紹介します」

藍染めの魅力は、季節や葉の状態、染め方によって、さまざまな仕上がりになることなので、その個性も楽しんでほしいと森永さんは話している。

今月の先生

森永 真弓（旧姓 田上）さん

（エルサルバドル／手工芸／2009年度4次隊・奈良県出身）　大学の美術工芸コースで染色と織りを学び、久留米絣の工房、市民向け工房などで技術に磨きをかけた。協力隊では米州農業協力機構エルサルバドル駐在員事務所にて、染色の素材調査、技術指導を行った。帰国後は結婚を機に熊本県に住み、博物館員として子どもたちの活動に携わる。現在は夫の森永武志さん（エルサルバドル／環境教育／2009年度4次隊）と「どんたけし農園」を運営している。

たたき染めや擦り込み染めなど子どもでも簡単にできる藍染めを指導する森永さん

藍の葉の入手について

藍染めは世界中で行われていますが、地域によって使用する植物の種類が異なります。日本やアジアでよく使用されているのはタデ科の藍です。インドやアフリカ、中南米ではマメ科の藍が、ヨーロッパではアブラナ科の藍が主に栽培されています。植物の種類が違っても、含まれている成分（インディゴ）は同じです。

日本で伝統的に使用されてきたタデ科の藍

花を咲かせた藍の草。種から育てると5カ月程度で葉が収穫できる

藍の葉の収穫の様子

藍は自生している可能性は低いですが、丈夫で育成が比較的簡単なため、種を入手して育てるのも一つの方法です。日本の場合は3～4月に種まきをすれば、8月前後に収穫できます。配属された地域に藍染めの工房があれば、葉を入手できないか交渉してみるとよいでしょう。また、藍の葉が無くても他の植物で試してみるのも面白いでしょう。

たたき染めに使用する時は、なるべく若い葉を摘み取り、摘み取ったらすぐに使用します。葉の中の成分が酸素と反応して染まるのですが、長く置いておくと反応しなくなってしまうためです。

一番簡単！ たたき染め

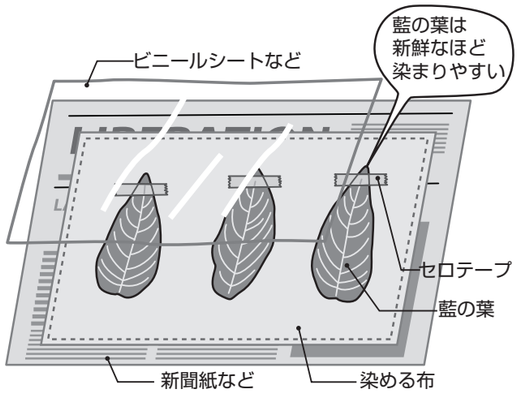
藍の葉に何の加工もしなくても、インディゴブルーが楽しめる方法です。藍の成分がたたくことで素材に吸い込まれて染まる仕組みです。生葉染めはシルクなど動物繊維が基本で、木綿などを染める際は豆乳に浸すなどの処理が必要ですが、たたき染めは染められる素材が比較的多いことも利点です。葉を自由に並べたり、はさみで好きな形に切ったりして、いろいろとデザインを楽しんでみましょう。

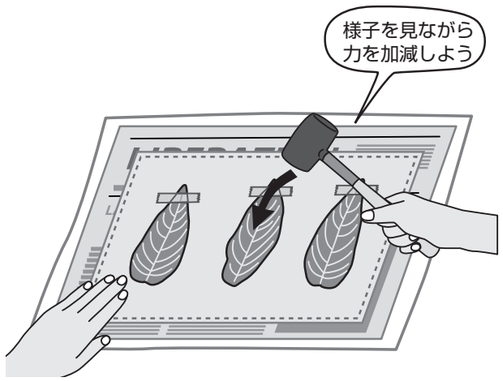
材料
染める布（綿・麻・シルクなど天然素材の布、Tシャツ、ハンカチなど）、藍の生葉、古新聞や要らない板など下敷きにするもの、金づち、ビニールのシートや袋（クリアファイルのようなものでも可能）、セロハンテープ

集中してたたき染めに取り組む子ども

❶ 古新聞や板の上に染める布を置いて、布の上に藍の葉を並べ、動かないようにセロハンテープで留める。

❷ ビニールシートか袋をかぶせ、片方の手でビニールを押さえ、その上から金づちで軽くトントンとたたき、葉の汁を布に染み込ませる。



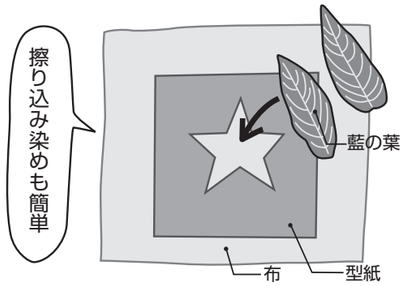


❸ 葉の汁が布に染み込んだら、ビニールと葉を取り除き、30分くらいそのままにしておく。

❹ 布をせっけん水で洗ってこびりついた葉などを落とす。その後、軽く絞って干して乾燥させることで酸化して、藍色に変化していく。強く絞ると模様がにじんでしまうため、水が滴るくらいの絞り具合でよい。

型紙を使ってさまざまな模様を表現できる擦り込み染め

好きな形にくりぬいた型紙を作って布の上に置き、葉を2、3枚揉み込むように素材に擦りつける「擦り込み染め」も簡単な藍染めの方法です。型紙によってさまざまなデザインが表現できます。型紙には、破れないよう少し硬めの紙が適しています。



Text＝阿部純一（本誌）　Illustration＝岡村裕美　写真提供＝森永真弓さん

先輩隊員の

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

インフラ整備を通じて人々の生活向上に貢献したい

今月の先輩

杉原俊宏さん Toshihiro Sugihara

ガーナ／PCインストラクター／
2017年度4次隊・岐阜県出身

就職先：戸田建設株式会社

事業概要：建築・土木事業において、エンジニアリングおよびコンサルティング業務を提供する総合建設会社。不動産の売買・賃貸などの投資開発、再生可能エネルギー事業も展開。海外に事業拠点、グループ会社を有し、海外事業の歴史も長い。

杉原俊宏さんの略歴：

1990年　岐阜県生まれ
2010年～17年　民間企業に勤務
2018年3月　協力隊員としてガーナに赴任
2020年3月　帰国
2020年6月～2022年7月　民間企業に勤務
2023年7月　戸田建設株式会社に就職

JICA海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

高専時代、オーストラリアに半年間留学し、将来は海外で働きたいと考えるようになった杉原俊宏さん。航空機のエンジニアとして大手重工メーカーに就職したが、将来、海外で働くためには別の経験も必要だと考え協力隊への応募を決めた。任地には「ここで経験を積めば、世界中どこにでも住めるだろう」とアフリカを希望した。

ガーナでは、職業訓練校のPCインストラクターとして活動する一方、ガーナに派遣されている協力隊員を中心に約70人が集まる総会の自治会長を任された。総会で帰国後の進路に不安を語る隊員が多かったことから、杉原さんは、ガーナで働いている日本企業の社員を総会に招き意見交換会を企画するなど、新たな試みを導入していった。

自身の進路については、任期が終盤に近づくと「PARTNER」(※)やネットをチェックし、在外公館や大使館など気になる求人を見つけると応募もした。総会に招いた会社員から求人情報を教えてもらうこともあったという。

任期後はドバイ万博で仕事をする予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により万博が延期となり、杉原さんは帰国した。そして、ガーナで知り合った会社員の紹介で、海外事業を展開している民間企業に就職したが、コロナ禍のため海外勤務ができず退社。その後はヨーロッパを旅行し、ドイツでうどん店を開こうと香川に修業に出たりもしたが、「1カ所にとどまることが性に合わないんです。海外を転々としながら仕事をしたいと、改めて思った」という。

現在、勤務している戸田建設の求人情報は、協力隊の同期が起業したWATATU株式会社に紹介してもらった。現在はスリランカに駐在しているが、会社からはアフリカでの活躍も期待されている。

「ガーナには日本のゼネコンが数十年前に建設した道路が今もきれいに残っていて、『助かっている』と感謝されることもありました。そんなふうに、現地に長く貢献できる仕事をしたいと思っています」

1 協力隊時代　2018年3月～2020年3月

パワーポイントを駆使して行うプレゼン大会に参加した生徒たちと杉原さん

ガーナの職業訓練校でコンピュータの指導をする杉原さん

配属先は電気、調理、服飾など6コースを開講している生徒数120人ほどの職業訓練校です。ガーナでは2007年から必修科目にICTが導入されましたが、指導教員も環境も十分ではなかったため、PCインストラクターの私には、全生徒を対象としたPCの授業と同僚への技術移転が要請されました。同僚の授業は座学がメインで実技がなかったため、校内に約20台あったパソコンを修理し、使えるパソコンをクラスでシェアしながら、実技を交えて授業を進めました。職業訓練校ですが、卒業後の就職先は少ないため、授業では起業や就職に役立つよう、パワーポイントを使ったプレゼンのやり方を指導。技術を競うコンテストなども企画し、モチベーション維持に努めました。

2 民間企業に勤務 2020年6月～2022年7月

任期中にガーナで知り合った日本の商社の人に誘われ、海外でコンサル、施工管理をしている会社のガーナ支社に就職しました。しかし、コロナ禍のため日本での勤務が主となってしまったこともあり、海外で働ける場所を求めて転職を決めました。

3 就職活動　2023年1月～

協力隊の同期の集まりに参加した際、海外で働きたいと話したところ、タンザニアの小規模農家を支援しているWATATU株式会社を起業した元隊員から、別事業として協力隊経験者と企業のマッチングを行っていると聞き、ウェブサイトの「協力隊転職ナビ」の求人情報をチェックするようになりました。同社の自己分析プログラムの受講やニーズに合った求人紹介、応募書類の添削、面接対策を活用しました。

4 書類提出　2023年3月

「協力隊転職ナビ」で、戸田建設がアフリカ勤務の人材を求めていることを知り、履歴書と職務経歴書を提出しました。自己アピールでは、メーカー、協力隊、前職と異なる業種を経験する中で、それぞれの現場に適応するためにスキルアップをしてきたこと、現地語を交えてのコミュニケーション力を培ってきたこと、途上国に住みインフラが整備されていく利便性を身をもって感じていて、この仕事に携わっていきたいことなどを書きました。

5 面談・面接　2023年3～5月

私の能力が現場のニーズに合っているのかを確認するため、まずは現場の代表と2回面談し、その後、人事部・役員との面接が行われました。面談・面接では、ガーナの生活を通してインフラの整備がいかに重要であるかを実感したことなどを話しました。入社後に聞いた話では、アフリカ勤務を希望したことも、採用の決め手の一つだったらしいです。

2023年5月 採用決定 ▶ 7月 入社

現在の仕事

土木グローバルプロジェクト室に所属し、土木施工管理を行っています。入社後はアフリカに赴任する予定でしたが、アフリカでの業務が予定よりも遅れているため、約2カ月の本社勤務を経て、9月からODA（政府開発援助）の有償資金協力で建設した橋の瑕疵（かし）対応のため、スリランカに駐在しています。3月ごろにアフリカの案件が動きだせば、そちらに赴任する予定です。当社は現地でエンジニアを雇用し本社で研修を実施するなど、海外人材の発掘・育成にも力を入れています。将来的には、そうした人材育成の分野でも貢献できたらと考えています。

現在はスリランカに駐在中の杉原さん

後輩へメッセージ

協力隊の経験を言葉でしっかり伝えることができれば、興味を持ってくれる企業は多いと思います。私の場合、そのために役立ったのが、履歴書のアピールポイントを何度も書いたことです。私は任期中から気になる求人に応募していましたが、そのたびに、自分の経験を振り返り、それをどう伝えたらいいのか考えていました。それを繰り返したことで、自分のことを客観的に伝えるための引き出しが増えたと感じています。その時は結果につながらなくても、長い目で見れば必ず役立つと思います。

※PARTNER…JICAが運営する国際キャリア総合情報サイト（https://partner.jica.go.jp/）

Text＝油科真弓　写真提供＝杉原俊宏さん

派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

▶ 実家のキウイフルーツ農園を継ぎ持続可能な農業を追求

平野耕志さん Koushi Hirano
ザンビア／村落開発普及員／ 2011 年度 4 次隊・静岡県出身

第1回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰
SDGs実践賞

❶ザンビアで共に活動したカウンターパートや診療所スタッフの面々と。
「2年間のザンビアでの経験が現在の活動の核になっています」

❷学生のアイデアから生まれたキャンプサイト
❸農園では常時2〜3種類のキウイが食べられ、キウイの食べ放題やBBQ、動物の餌やり体験などのアクティビティが楽しめる
❹一緒にソーラーシェアリングの設備を造った静岡県立磐田農業高等学校の学生たち。金属の架台に細長い太陽光パネルを設置し、下部にも光が届くようにする仕組みである

ザンビアで見いだした農地の役割
生きる力を育む農業を掲げ、地域活性化を目指す

静岡県掛川市に広がる茶畑の中にあるキウイ観光農園「キウイフルーツカントリーJapan」。東京ドーム3個分の広さを誇る園内には約80種類1200本ものキウイの木が育ち、家畜飼育などと組み合わせた循環型農法が取り入れられている。この農園を中心に、農業の新たな役割を提案しながら地域活性化を牽引（けんいん）しているのが代表の平野耕志さんだ。

日本のキウイ栽培のパイオニアで、循環型農法などの先進的な農業にも取り組む両親の次男として生まれた平野さんは、そこに集まる海外の農業研修生や地域の人々を見て育った。当然のように農業や海外に興味を持ち、地元の農業高校から東京農業大学短期大学部に進学。派米農業研修生としてアメリカでも1年半学び、掛川に戻って直面したのは日本の農業の現状だった。

「農家の後継ぎだった同級生の多くが離農し、耕作放棄地は増え、見慣れた美しい茶畑の景色は変わり果てていました。実家を手伝いながら、地域を何とかしたいと田植えや茶摘みの体験イベントを企画したりもしましたが、人が集まらずに大赤字。解決策もなく、自分の理想とする農業を模索する日々が続きました」

未知の世界で新しいアイデアを得たいと応募したのがJICA海外協力隊だった。任地はザンビアの首都ルサカ。コンパウンドと呼ばれる低所得層の密集居住地区で、地区内の農地での野菜・果樹栽培を通じた栄養指導や収入向上支援に携わった。

「活動の中で、貧困層ほど栄養が偏り、生活習慣病を患ったり、命を落としたりする現実を知りました。どんな予防薬や特効薬があっても食べ物がなければ命は救えない。農業は命の土台なのだと気づきました」

同時に、農地はザンビアの人々にとって暮らしの一部でもあった。手作りの十字架を置いて礼拝をしたり、髪を切ったり、時には子どもが宿題を持ってきて勉強していたりもした。

「赤ちゃんをおぶった5歳の女の子が畑で火をおこして調理する姿に驚きました。日本では火を扱った経験の乏しい子がたき火に触れてやけどしたりするのに、この違いは何だろうと。自分がやりたいのは、栽培して出荷するだけの農業ではなく、人々の集う場となり、若い世代の生きる力を育む農業なんだと確信しました」

2014年に帰国した平野さんは、〝耕す畑から、人の集まる畑へ〟をコンセプトに活動。農業に興味がなくても楽しければ人は集まるはずだと、ザンビアで見た光景をヒントに、音楽祭やヨガ、青空美容室などの体験イベントを積極的に開催した。同時に、持続可能な地域づくりを目指し、近隣の農家や行政、大学、企業を積極的に巻き込んでいった。

22年には、掛川市やアイ・シー・ネット株式会社グローバル事業部と連携し、県外の中学生を対象にした3泊4日の探究学習型の修学旅行を開始。若者と農業の接点をつくり、就農意識の向上も図る考えだった。

「生徒たちは掛川の現状を取材し、最終日に課題解決のためのビジネスモデルを発表します。修学旅行生の誘致に疑問を抱いていた農家さんも、生徒たちと話す中で自分たちの農業の意義に気づいてくれるようになりました。僕よりも県外の人、それも若い人が褒めてくれるほうが響くのです」

平野さんが学生のアイデアを元に始めた農園内のキャンプ場も新たな客層を掘り起こした。修学旅行で来た若者が、その後もインターンとして農園の手伝いに来てくれるなど、新たなつながりも生まれている。

現在は、掛川市や地元の高校と共同でソーラーシェアリング（※）事業にも力を入れる平野さん。効果を検証しながら徐々に拡大し、得られた知見を、日本のみならずアフリカなどの途上国の農家の経済的負担軽減にも役立てたいという。

「先代からの循環型農法で水や肥料を賄い、さらに太陽光発電で電気も賄うことができれば〝完全SDGs型〟の観光農園になります。将来、農薬や資材を多く使った大規模農業に行き詰まりが生じた時に、別の選択肢として一部でもマネしてもらえたらいい。持続可能な農業経営の手法として、世界に広まればと思います」

※ソーラーシェアリング…農地の一時転用許可を受け、農作物に必要な日光を遮らないように間隔を空けるなどして太陽光パネルを設置し、営農を続けながら発電する仕組みのこと。

平野さんの歩み

1987年、静岡県掛川市で代々続く農家の次男として生まれる。

「いつも家には海外からの農業研修生が当たり前のようにいたので、子どもの頃、周りの人に『あなたの家にはどこの国の人がいるの?』と聞いたりしていたそうです」

2007年3月、東京農業大学短期大学部卒業後、派米農業研修生として渡米。

「アメリカでは大規模農園の経営者から、農業は落ち目で、ハードな仕事だと聞かされました。向こうでも〝ファーマー〟は好んで就く仕事ではないとのイメージが強く、やはり農業の置かれた状況は厳しいのだなと感じました」

2012年3月、協力隊員としてザンビアへ。

「国際協力NGOのAMDA-MINDSやザンビアの保健省が管轄するジョージ・アムダコミュニティセンターで活動しました。野菜栽培の指導や食育のほか、駐車場経営やティラピアの養殖、養鶏、キノコ栽培、PC教室などにも挑戦し、センターの運営資金や診療所への寄付に充てました。時には意見がぶつかることもありましたが、現地の人の声を尊重することが大事だと思います」

2014年3月、帰国。翌年から静岡大学大学院で農業マーケティングを学ぶ。

「ザンビアで地位の高い人と話す時、短大卒とわかると相手にされないという経験がありました。今後、自分のやりたいことを形にするためにも、大学院に行くことは必要だと考えました」

2020年、実家の農園を継ぐ。短期の農業専門家としてネパールやマダガスカルなどでの技術指導も行っている。

「先代のやってきたことを受け継ぎつつ、自分がやりたいことの基盤をつくっていきたいです。まだ両親も元気なので、向こう10年間が自分のために挑戦できる勝負の時期でしょう。また、若い世代のためにも、自分はファーマーだと声を大にして言っていきたいと思います」

Text＝秋山真由美　写真提供＝平野耕志さん

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

天皇皇后両陛下が帰国したJICA海外協力隊と御懇談

帰国したJICA海外協力隊員の代表が9月26日、皇居（御所）において天皇皇后両陛下に御懇談の栄を賜り、派遣国での活動をご報告いたしました。

今回帰国したJICA海外協力隊員は、2020年1月以降の新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響を受け、派遣が延期されたり、日本への一時帰国を余儀なくされたりしながらも、日本での待機期間中には、現地へオンラインでの支援活動や能力強化などを行い、これらを現地に戻った際の活動に生かすなど、コロナ禍を乗り越えて派遣国での活動に従事しました。

今回両陛下にお目にかかったのは松山里美さん（スリランカ／日本語教育）、山崎鉄平さん（カンボジア／体育）、園尾洋平さん（パラオ／小学校教育）、深澤千波さん（ケニア／看護師）、尾崎隼人さん（ガーナ／コミュニティ開発）、村上瑞樹さん（マダガスカル／コミュニティ開発）、千葉和人さん（ドミニカ共和国／コミュニティ開発）、鬼塚慶子さん（ペルー／高齢者介護）の8名です。御懇談後、参加者からは、「両陛下との御懇談の雰囲気が大変和やかで、緊張がほぐれ打ち解けた雰囲気でお話しすることができた」、「両陛下が真剣に報告をきいてくださり、様々な質問をされ、帰国隊員の活動に大変関心をもっていただいたことに感銘を受け、励みになった」などの感想をいただきました。

NEWS

秋篠宮皇嗣同妃両殿下が帰国したJICA海外協力隊員と御接見

帰国したJICA海外協力隊員の代表が10月13日、赤坂御用地において秋篠宮皇嗣同妃両殿下に御接見の栄を賜り、派遣国での活動をご報告いたしました。

今回、両殿下にお目にかかったのは、北川 諒さん（ラオス／コミュニティ開発）、石井理紗子さん（ルワンダ／小学校教育）、神崎早紀子さん（エジプト／学校保健）、臼井 希さん（ブラジル／幼児教育）、泉安佐さん（SV／タジキスタン／日本語教育）の5名です。

御接見後、参加者からは、「最初は緊張していましたが、両殿下のお心遣いやあたたかい雰囲気に緊張が和らぎました」「両殿下が真剣に活動報告を聞いてくださり、協力隊の活動への関心の高さに感動しました」などの感想をいただきました。

REPORT

「ミドルとシニアのボランティア EXPO」「国際協力キャリアフェア2023」開催報告

11月23日（木）に東京で「ミドルとシニアのボランティア EXPO」が行われ、ミドル・シニア層がそれまで培ってきた技術と知恵を発揮する方法の一つとして、JICA海外協力隊の紹介を行いました。会場ではOVによる協力隊体験談を2回行い、JICA海外協力隊ブースには、経験を生かせる職種の選び方などの相談や質問が寄せられました。また、11月25日（土）には東京で「国際協力キャリアフェア2023」が開催されました。会場とオンライン配信のハイブリッド形式でOVによる協力隊体験談を行い、多くの方にご参加いただきました。JICA海外協力隊ブースは会場のみの出展となりましたが、応募の仕方や帰国後のキャリアのことなど個別の相談が多く寄せられました。

クロスロード［ 2024年1月号 ］

第60巻第1号　通巻693号
発行日　2024（令和6）年1月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷（株）　校正：佐藤智也

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

編集後記

「掃除やゴミの分別が苦手」という方、その理由はわかりますか？ P21「今、読みたい電子書籍」でお薦めいただいた本に、その答えがあります。目からうろこ！面白い本でした。（千川美奈子）

藍染めは世界各国で行われてきたものって知っていましたか？私はてっきり日本の伝統工芸だと思っていました。P26-27「みんなの教材づくり&アクティビティ」を見てね！　（阿部純一）

昨夏の甲子園を沸かしたあの堤 尚彦監督に、P22-23「失敗に学ぶ」で協力いただきました。著書の売り上げでジンバブエに野球場を造る夢があるとか。応援しています！　（飯渕一樹）

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。　●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

JICA海外協力隊派遣現況

（2023年11月末現在）

現在の派遣国数
73カ国

（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	24	3
エチオピア	1	
ガーナ	45	
ガボン	9	1
カメルーン	20	
ケニア	31	
ザンビア	17	1
ジブチ	11	
ジンバブエ	12	
セネガル	26	
タンザニア	9	
ナミビア	13	
ベナン	17	
ボツワナ	26	2
マダガスカル	29	
マラウイ	25	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	31	1
ルワンダ	35	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	16	
インドネシア	19	1
ウズベキスタン	15	2
カンボジア	34	
キルギス	24	
ジョージア	6	2
スリランカ	21	
タイ	20	4
タジキスタン		1
ネパール	1	
バングラデシュ	2	
東ティモール	15	
フィリピン	5	
ブータン	25	6
ベトナム	46	
マレーシア	17	7
モルディブ	1	
モンゴル	30	3
ラオス	16	3

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
サモア	1	1
ソロモン	14	
トンガ	3	1
バヌアツ	6	1
パプアニューギニア	5	
パラオ	24	5
フィジー	12	
マーシャル	1	3
ミクロネシア		2

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	28	
チュニジア	17	1
モロッコ	21	1
ヨルダン	28	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		4	1	3
ウルグアイ		7		
エクアドル	19	2		
エルサルバドル	18			
キューバ		3		
グアテマラ	26	1		
コスタリカ	16			
コロンビア	12	4		
ジャマイカ	5			
セントルシア	11			
チリ	13	2		
ドミニカ共和国	16		6	
ニカラグア	10	2		
パナマ	4	1		
パラグアイ	22	3	3	
ブラジル			38	2
ベリーズ	9			
ペルー	35	2		
ボリビア	24	2	1	
ホンジュラス	19			
メキシコ	10	9		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中（男性／女性）	1,137（465／672）	96（79／17）	49（19／30）	5（3／2）	1,287（566／721）
累計（男性／女性）	47,245（24,910／22,335）	6,672（5,387／1,285）	1,598（617／981）	553（256／297）	56,068（31,170／24,898）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊

任地の思い出を聞きました。

あの日、地球の、あの場所で。

肉の貴重なソロモンで鶏を育てて食べる

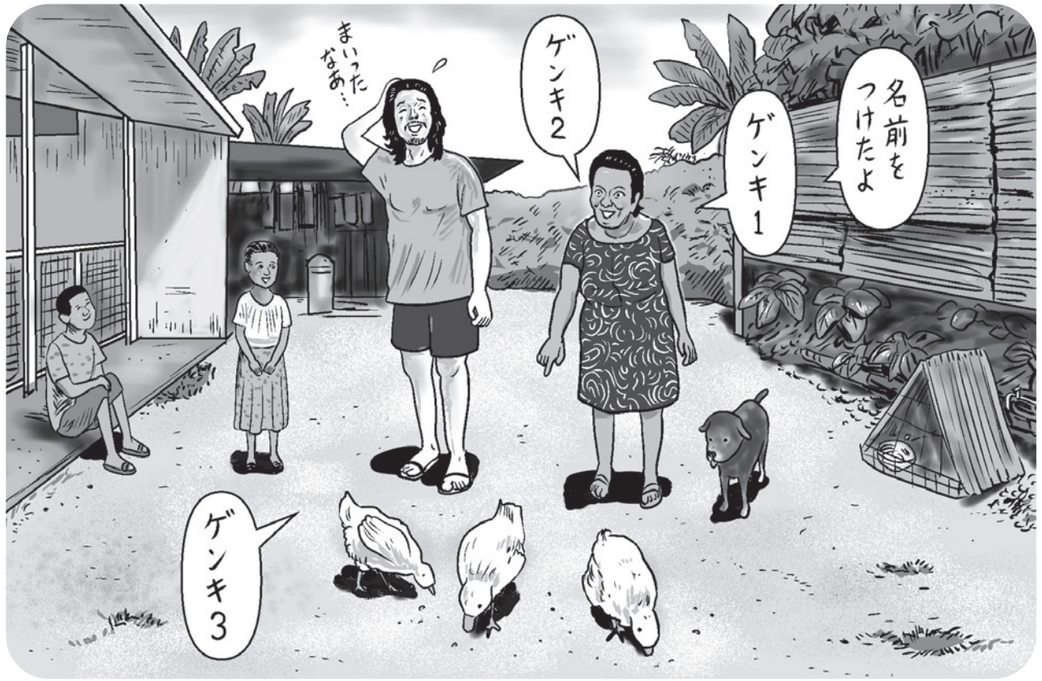
今でも昔ながらの生活スタイルを続ける人が多いソロモン。地方には、食料をほとんど自給自足している村もあります。ただ、私が派遣されたガダルカナル島にある首都ホニアラには大きなマーケットがあり、魚や野菜、果物も普通に買える環境でした。

ですが、それでも手に入りにくかったのが肉類です。鶏肉でさえ国産のものは流通しておらず、オーストラリアから輸入された冷凍の肉ばかり。そんな暮らしの中、ひょんなことから家でヒヨコを育てることになりました。ソロモンへの協力隊派遣40周年記念イベントに合わせて日本のマジシャンが来た際、マジックに使うヒヨコ3羽を私が現地の中国人から手に入れたことから、公演の後に引き取ることになったのです。

当初は籠の中でピヨピヨ鳴いていたヒヨコたちですが、鳥用の飼料や残飯を食べてどんどん育ち、庭で放し飼いするようになりました。日頃から私が〝お母さん〟と呼んで慕っていた大家さんが「ゲンキ1、2、3」と私の名前をつけているのに苦笑したりもしましたが、2週間たつ頃には3羽とも立派な鶏になりました。

さあ、このゲンキたちの処遇をどうするか？という時に、ちょうど帰国する隊員のお別れ会がありました。そこで思い切ってゲンキの1羽を締め、ローストチキンに。新鮮な若鶏なので身もやわらかく、肉の貴重な任地で最高のごちそうとなりました。残る2羽も順次私たちの胃袋に収まっていき、首都隊員ながら、図らずも命を育ててありがたくいただく経験をすることができました。

飯盛元貴（いいもりげんき）さん
ソロモン／体育／2018年度1次隊・熊本県出身



Illustration＝牧野良幸　Text＝飯渕一樹（本誌）

任地の食生活に彩りを！

隊員めし

教える人

斉藤亮平（さいとうりょうへい）さん
シリア／音楽／2006年度2次隊、ブータン／音楽／2009年度9次隊・東京都出身

国立音楽大学を卒業後、協力隊に参加。パレスチナ難民地区の小中学校の音楽教育普及に取り組む。帰国後、ブータンの音楽学校の講師や出版社勤務を経て、2013年よりシリア難民支援に携わる。17年より特定非営利活動法人JIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）職員。同NPOは、湾岸戦争後に増えたがんや白血病のイラクの子どもたちへの医療支援やシリア難民支援を行う。趣味は料理で、中東の家庭料理のレシピも多数収集。

今月の料理

From Syria

シリアの家庭料理

アダススープ（レンズ豆のスープ）

●材料（4〜5人分）

- レンズ豆（オレンジ色のもの）…… 300g
- 玉ねぎ …… 1/2個
  ※にんにくやニンジン、セロリを入れてもおいしい
- スパイス …… お好み量
  （クミンパウダー、コリアンダーパウダー、ターメリックなどの好きなもの）
- 固形コンソメ …… 1個
- オリーブオイル …… 大さじ1
- 塩 …… 適量
- レモン …… 1個

●レシピ

❶玉ねぎをみじん切りにし、鍋にオリーブオイルを入れて炒める
❷レンズ豆を洗って水を切り、❶に入れてなじませる
❸❷に水を400mlほど加え、固形コンソメを入れて沸騰させる。その後、弱火で20〜30分ほど煮込む。この時、ヘラなどで混ぜながら水が足りないようなら少しずつ足す
❹塩、スパイスを入れて味を調える
❺食べる直前に搾ったレモンをかける

<アドバイス>

シリアやアラブ圏で定番のスープで、鍋一つで30分以内でできます。レンズ豆は火を入れただけで形が崩れてドロッとしますが、❸で、ヘラやハンドミキサーなどを使って豆をつぶしてポタージュくらいの滑らかさにするとおいしく仕上がります。❹で少し塩気を強めにして、食べる直前にたっぷりとレモンを搾ってかけるのもお薦めです。クルトンや、素揚げしたトルティーヤを添えてもおいしいですし、揚げたホブズ（アラブ地域のパン）をかけるとシリア風になります。

斉藤さんはJIM-NETでイラク事務所に駐在した経験もある。同NPOでは現在、支援している子どもたちが描いた絵を缶に印刷したチョコレートを、寄付のお礼として支援者に贈る「チョコ募金」を冬季限定で行っている。寄付はイラクの小児がん支援や、シリア難民支援などの活動に使われる。
▶https://www.jim-net.org/2021/10/05/7283/

レシピ・写真提供＝斉藤亮平さん　Text・再現料理＝ホシカワミナコ（本誌）　Photo（再現料理）＝干川 修

クロスロード
2024年1月号
2024年1月1日発行（毎月1回1日発行）第60巻第1号 通巻693号
編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

＼公開！／

私の派遣国生活

［スリランカ］

奥寺信行（おくでらのぶゆき）さん
（環境教育／2021年度3次隊・岩手県出身）

暮らしている市、町、村

町はずれに広がる田園風景。自然豊かなクリヤピティアでは夜はホタルの舞う光景が見られる

活動終わりに紅茶を飲みに毎日のように立ち寄る店

クリヤピティアは北西部州クルネーガラ地区で2番目に大きい町なので、中心部はにぎやかで店も多いのですが、町から少し外れると田んぼが広がっていて、故郷の岩手県と同じような美しい風景に心がなごみます。ほぼ毎日、活動後に立ち寄る喫茶店があって、紅茶を飲みながら、店のご夫婦とたわいのない会話を楽しんでいます。落ち着く、好きな場所です。休日には、現地の友人が自然の美しい所や、スリランカ料理のおいしい店を紹介してくれて、飽きません。

活動の様子

材料を工夫して実践しやすくしたコンポストを地域の方々に紹介する奥寺さん

首都から約80キロ離れたクリヤピティア町役場に赴任して、地域住民に対するゴミ分別の徹底、家庭用コンポストの普及、学校での環境教育を行っています。経済危機の影響で高騰した発酵食品を住民が用意できないことなどが原因で、コンポストはあまり活用されていませんでした。そこで自分なりに調べ、米のとぎ汁を使って乳酸菌を作り出す方法を発見し、経済的な負担なく作れるコンポストを紹介しています。

食べ物

カレーは200～300ルピー（約100～150円）と安く、しかもおなかいっぱいになる

朝と昼はスリランカカレーです。プレートの真ん中にご飯、その周りにいろいろな味つけのおかずが盛られていて、手で混ぜながら食べるのがスリランカの作法です。最近やっと、こぼさずに手で食べられるようになりました。日差しが強くて暑い地域ですが、おかげでパイナップルは甘くてとてもおいしいです。

米粉とココナッツミルクから作る軽食のアーッパも好物

住まい

キッチンつきのリビング

一軒家の1階に大家さん夫妻、2階に私が住んでいます。間取りは、キッチンつきのリビングと寝室が2つ、シャワールーム、トイレです。洗濯機はないので洗濯はシャワールームで手洗いしていますが、シャワーは温水器が壊れているため、お風呂も水シャワーです。夕食はピーナッツやゆで卵くらいで済ませるので、あまりキッチンは使いません。部屋は暑いですがエアコンはないので、寝る時は扇風機をつけています。大家さんとは紅茶を飲みながら話したり、休みの日は朝ご飯を一緒に食べたりします。

写真提供＝奥寺信行さん　Text＝阿部純一（本誌）

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722 www.fsc.org
VEGETABLE OIL INK
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
ジャイカ JICA